

---

# 東方幻想入り

コノハ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方幻想入り

### 【NZコード】

N1256Y

### 【作者名】

コノハ

### 【あらすじ】

私、星空澪は不思議な世界に迷い込んだ。不思議な子、変な子、大人をバカにすることしかできない子供。そう言われ続けてきた私が迷い込んだのは、優しい人がたくさんいる、私以上に変な、独特な世界だった。その世界のことを、人は幻想郷と、呼んでいた。

- ・この作品は二次創作です。原作との相違点、キャラクターの違い、設定の違いが多々あります。ご了承ください。

迷い込んだ私（前書き）

## 迷い込んだ私

自己紹介から始めるべきだらうか。私の名前は星空澪。性別女性。生まれてから十年、楽しい事よりも辛い事の方が多かつた。母とお父さんが六歳の時に離婚して、それからすぐに母が自殺したせいで、私は一人きりになってしまった。いや、ふたりがいたころも、一人きりだつたようなものか。

今はお父さんが養つてはくれてているんだけど、お金を送つてくるだけで、他に父親らしいことはしてくれない。

お父さんは私のことを愛してくれてはいるはずなんだけど、罪にならないギリギリまで私を放つておくみたい。怒つてくれるのを期待して学校を一ヶ月行かなかつたこともあつたけど、先生に怒られただけだつた。

私は運も悪いのか、はたまた巡り合わせが悪いのか、学校の帰り道に攫われて死にかけるような日にも何度も遭つた。何をしようとも父親が何も言つてこない、というのがどこからか伝わつて、私は犯罪者の格好の的になつた。それでも五体満足で生きている私は、ある意味で運がいいんだろうけど。

こんな人生を歩んできた私は、いつしかどんなことにも動じない心を手に入れていた。もし今心臓の上にナイフが突き刺さつても、普段と変わらず状況を分析できる自信がある。大人はそれを心が死んだと表現したがるけど、私はそう思はない。冷静であるということは、生き残ることに繋がる。私は短い人生の中、得られた経験からそう悟つていた。

自分の自己分析が普通の子供達よりも明晰なのには理由がある。自分のことを冷静に、客観的に見つめられるようになつたとき、自身の中の語彙の少なさに非常に困つた。そのことに対して対策を講じたからに他ならない。

一人きりの私は、他の子供と違い、家族ではなく他人に頼つてしま

が生きていけない。

冷静になつたせいで感情を表情や行動で表すことに関して極端なまでに不得手になつてしまつた私が、自分のことを理解してもらつためにどうすればよいのか。私が出した結論は、話すことだつた。

痛い、苦しい、楽しい、嬉しい、気持ち悪い、気持ちいい、と言つたものを言葉で表現しなければならぬと、私は考えた。

そのために必要な言葉を、私は家にいる間必死で覚えた。辞書に書いてある言葉の八割を覚えて、大人向けに書かれた本を読むのには苦労した。だが、苦労しても知識を頭に詰め込んだおかげで、少しは理知的に物事をかんがえるようになったと思つていい。ただ、その弊害もあつた。知りたくもないような醜悪な知識も、同時に頭に入つてきたのだ。

私の目の前に広がつてゐる深い深い森。これも、私に恐怖をもたらした知識だつた。本曰く、一度迷うと一度と元の場所に帰れない。私はそここのど真ん中……どこのが真ん中なのかはわからないが、とにかく三百六十度、木と草の縁と幹と地面の茶色で埋まつてゐる。地面に目をむけると、土と草に混じり、色とりどりのキノコがいくつか生えていて、一層不気味に私は感じた。

今度は自分の姿を見る。私は白い素足を晒し、水玉模様の長そで長ズボンのパジャマに身を包んでいた。つまり私は、眠る前の格好のまま、ここにいるというわけだ。私は立ち上がり、何も考えずに前に進んだ。

どうせ方角を知る方法など知らないのだ。ならば、ひたすらに真つ直ぐに進めばいつかはどこかに出るだろう。出なければ、野垂れ死に。いつものことだ。何かに成功しなければ、死ぬ。

死ぬのか、死なないのか。わからないことが少しだけ、怖い。枝をくぐり、草をかきわけ進みながら、そんなことを考える。そして同時に、恐怖を感じながらも冷静に考える自分を奇妙に思う。

「……」

足の裏に痛みを感じ、足をあげてそこを見る。鋭い石を踏んだ

ようで、踵の部分の一部が裂け、血が流れていった。

このまま歩き続けたら化膿するだろうか。もしそうなつたら、足が使い物にならなくなるのだろうか。……どちらにせよ、この痛みではもう歩けない。そう判断した私は、その場に座り込んだ。じめりとした感覚がお尻に伝わる。今もう一度立ち上がり、お尻回りが土色に汚れていることだろう。

注意深く周りを見回しながら、重要なことを考える。

私はなぜここにいるのか。家のベッドで横になり、目を閉じたのは覚えている。しかし、私はここで目覚めた。

考えられるヒピソードは、犯罪者に攫われたが必死な思いで逃げ出し、その途中で力尽き眠りについた、というもの。もしそうなら、私の眠る前の記憶があやふやなのが気になる。

……汚されたのだろうか。

少し不安になつて、服やその他色々なことを調べた。服には脱がされた跡はなく、肌にも汚れはなかつた。汚されたわけではないのがわかつて、息をついた。

ならばなぜ私はここにいるのだろう。問い合わせが巡りだす。わからぬことばかりで、少しだけ不安になる。一度は否定したはずの可能性が、再び頭をもたげてくる。

「あなた、こんなところで何してるの？ 死にたいのかしら」

そんな時、女人人が茂みの奥から出てきた。白を基調とした服装に身を包んだ、宙に浮かぶ人形を従えた摩訶不思議な人だつた。

「助けてください。迷い込んでしまいました。踵を切つてしまい、動けません。肩を貸して頂けますか？」

私の丁寧語が間違つていたのだろう、目の前の女性は驚いたような顔をした。

「……あなた、人間？」

「はい。私は星空憑と申します。助けていただけますか？」

女性は気を取り直すように咳払いをすると、手を翻した。すると彼女の周りで浮いている人形達が私の脇のしたと膝の裏に周り、

私の体を持ち上げた。急に体が浮く感覚に全身が逆毛立つたが、何も言わない。

「……私はアリスよ。変な子、あなた」

「そうですか。お世話になります」

私は頭だけ下げてお礼を言った。アリスは私を一瞥すると、踵を返して森の中を歩き始めた。彼女の足取りは淀みなく、まるでこの森が自分の庭であるかのような自然な歩みであった。

「あなた、ここがどこかわかつてる?」

「わかりません。ここがどこか教えて頂けますか?」

「敬語やめて」

思つたりよりも鋭く、そんなことを言われた。多少面食らつたが、初めて言われたことでもないので言つ通りにする。

「わかった。ここはどこ?」

「ここは幻想郷。知つてた?」

「……知らない」

幻想郷。知りたいような知りたくないような、そんな名前だった。

## 優しい人に出会った私

魑魅魍魎の拠り所。忘れ去られたモノの最後の居場所。幽靈妖怪鬼悪魔。人に近しい人ならぬモノが跳梁跋扈する現世とは異なる違う世界。

「どうやら私は、そんな場所に迷い込んだようだつた。

「つまり私は忘れ去られた、と」

私は結論をアリスに言った。

母に置いていかれ、父とも長い間会つていない上、ついに友人や先生にも忘れられてしまったのだろう。一ヶ月休んだ後、さらに二ヶ月も学校にいかなれば、そうなるのは当たり前か。

「さあ。外の世界から来た人間は、必ずしも忘れられたから来るわけじゃないから」

「そう」

だからと言って、可能性が消えたわけじゃない。私が知ってる人全てに忘れられてしまった可能性は、未だにあるのだ。

「……忘れられてしまったのかもしれないのに、怖くないの？」

「怖い」

素直に答える。見知らぬ土地で一人迷い込んだせいか、得体の知れない恐怖が私の心の大半を占めていた。いや、それ以前の問題だ。お父さんも友人も、先生も。皆が皆、私というものを忘れてしまう。そんなのは嫌だった。眞実は、どうなのだろう。

「とか言う割に、冷静みたいだけど？」

「怖いのは事実だけど、それを態度に出すかどうかは別だと思う」「的確な表現ね」

褒めてもらえたはずなのに。心の奥が痛んだ。それは、振り向いたアリスの顔が、私に対する哀れみに満ちていたからだろうか。なぜ、この美しい女性は私を哀れむのだろう。外から来る、ということが珍しく、そして可哀想なことなのか？ それとも、ここに来る

理由は複数あるようなことを言つていたが、それが優しい嘘なのだろうつか。

もしそうなら、真実なんて知らない方がいいのだろう。

「あなた、なんでそんな話し方なの？」

「なんで、とは？」

そんな、とはどんな話し方なのだろう。よほど癪に障る言葉遣いなのだろうか。それとも、ここではタブーになつてゐるような言葉を知らず知らずのうちに使つてゐるのだろうか。

「その、言葉から感情を抜き取つたみたいな変なやつ。理由あるの？」

「理由……？」

言われて、少し悩む。

なぜ、このような話し方にしたのだったか。その記憶はかなり曖昧だった。元の話し方が、大人達を怒らせるからだったのか、他人に頼るに不利な口調だったからか。よく覚えていない。

「なぜかは、覚えてない」

「じゃあ、特に理由はないってことね。その話し方もやめたら？ もうと子供らしい話し方した方がかわいいよ」

「……」

親切心から、そんなことを言つてくれているのだろうか。嬉しくもある反面、悲しくもある。

「子供らしさなんて、要らない

「……そう」

私に必要なのは物事を考へることのできる頭と、知識。体なんて鍛えてもたかがしれているが、頭なら、心なら。それならば、何かあつた時死なずにすむかもしれない。読む本はつまらなかつたし、楽しくなかつた。それでも死にたくない一心で頑張つた。

頭の中が今のような頃には、私の中の子供らしさ……可愛いものが好きだと、フリフリとした服を好むとか、人形がお気に入りだと、そういったことは私の中から排除されていた。……いつ

か消えるものなのだ、惜しくはない。そう思つてゐるはずなのだ。

「……何かあつたの？」

私は思わず首を傾げた。今まで私を哀れんでいた瞳は、今度は心配そうに私を見つめていた。今までなら、大人達は皆、私のことなど知らない振りをしたのに。

「な、何かつて、何？」

「……怖い目に遭つた？」

私は呆気に取られた。なぜだろう。なぜこの人は私にこうも気をかけるのだろう。

「……あ、遭つたことなんて、ないよ」

「そう。辛いこと聞いちゃつたわね」

それきり、アリスは黙つた。怒らせただろうか。嘘をついたのが、わかつてしまつたのだろうか。

「私の家、空き部屋結構あるから、しばらく泊まつていつていよいよ」

「ありがとうござります」

そうお礼をいいながらも、私は戸惑つていて。なぜ、この人は私を泊めてもいいなんて言うのだろう。家族は何も言わないのだろうか。そもそも、なぜ警戒しないのだろう。私が悪人だとは思わないのだろうか。

「……それから、元いたところに帰るまでくらいなら、食事くらいは用意してあげる」

「……同情？」

本で読んだことがある。あまりに可哀想な人を見てしまうと人はつい優しくしてしまうのだと。私は、可哀想な人なのだろうか。

「……。嫌だったかしら」

「ううん。すごく嬉しい」

嬉しいのは嬉しいのだが、反応に困る。じついう時、どんな反応をすれば喜んでもらえるだろう。……しばらく考えて、お礼を言つ以外に思いつかなかつた。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで。帰るまでだから、きつとすぐでしょ」

そう言つてアリスが笑うのと同時、開けた場所に出た。相変わらず木と土とが視界のほとんど占めているが、広間のようなこの場所には木製の家があつた。小さい家だが、ただ広い私の家とは違つて人の温もりがありそうな、優しそうな家だつた。

「あれ、私の家だから」

「お邪魔します」

アリスは私のお礼に苦笑すると、家まで行つて玄関の扉を開けた。内装はさながらログハウスのようで、台所からテーブル、食器棚から食器にいたるまで全て木製で、テーブルの上にはおしゃれなクロスがかけてあつた。壁の上のほうに備え付けられた棚には、アリスの周りに漂つているような人形たちが所狭しと並べられている。私はアリスの人形に運ばれ、テーブルの近くにあつたソファの上に座られた。

「ここで待つってね」

アリスはそう言つと、玄関とは違う方の扉を開けて、どこかへ行つた。人形達が私の前でふわふわと浮き、何やら踊りを踊つている。その様子はなぜか楽しそうで、微笑ましかつた。

「楽しんでくれてるみたいね」

「うん。アリスが動かしてるの？」

頷いたアリスの手には、木製の籠があつた。救急箱だと思う。彼女は私のそばまで来ると、怪我をした足を取つた。怪我をある程度見終わると、驚いた様子で言つた。

「かなりざつくり切つたわね。痛くなかった？」

「痛い」

私がそう言つと、アリスは苦笑した。

「なら痛がるなり泣くなりしたらいいのに」

私は首を振つた。

「これが私の精一杯」

私は別に無理に痛いのを我慢して冷静を装っているのではなく、自然体でこうなのだ。そもそも私は痛いとちゃんと言つたし歩けないとも言つた。ちゃんと伝わったと思うのだが、足りなかつたのだろうか。もつと言葉を尽くさなくてはならないのだろうか。

「そうなの。……どんな感じ？」

「傷口同士が触れ合つて今でも裂かれるような痛みがする。血が止まらないのが少し不安。跡が残つてしまわないかどうかわからないのが怖い」

私は傷に関して思つていること全てを伝えた。過不足はないと思う。

「わかりやすくて助かるわ。その点に関しては大丈夫よ。ちゃんと血は止まるし、痛いのもなくなる。」ここまで大きいと跡になるでしょうけど、小さいものよ」

そう言いながら、アリスは籠の中からガーゼと包帯を取り出して、手当を始めた。見ず知らずの私に医療道具まで使つてくれるなんて。嬉しい。

「消毒するから、ちよつとしみるわよ」

「わかった」

消毒液がついたガーゼが、足の裏に当たり、染み入るような痛みが走つた。つんとするような臭いに、少しだけ嫌悪感を抱く。

「えつと、踵に包帯を巻く時は……と」

テキパキとしていたアリスの手際が、急にたどたどしくなる。おそらく手当をすること自体は多いのだろう。包帯を巻くほど怪我は少ないのだろうが。

もしかしたら、こんなやさしい女性にかいがいしく手当をしてもらえるのならば怪我をするのも悪くない、と思う人がいるかもしれない。

アリスの顔に視線を移す。人形なんかとは比べ物にならないくらい美しく凛々しい顔立ちの美しい人。でもそれは綺麗すぎて、見る人によつては彼女に冷たい印象を抱くかもしれない。こんなにも暖

かくて優しい人なのに、もつたいたいとは思つ。

「はい、これでよし……と痛かつたわね、賢いわ」

アリスは私の頭を撫でながらそう言つた。足に目を見やつた。踵から足首に巻かれた包帯は、手つきが拙かつた割には綺麗だつた。手先が人より器用なのだろう。そうでなければ人形を宙に浮かべるなんてできるわけがない。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで、星空さん」

「澪、と」

私はアリスの目を見つめて言つた。

「澪、もしくは星空澪と呼んで」

「名前、嫌いなの？」

頷く。星空。美しくも儂い夜空に輝く星々と同じ名前。本来なら誇るべきところなのだろう。だが私は、この名前を同級生にからかわれ、先生にまで変な名前と言われたせいで、誇らしいどころか嫌悪感を抱いていた。お父さんと私を繋ぐの大好きなものだけど、嫌いなものは、嫌いなのだ。

もしどうしても呼びたいというのなら構わないけど、名字だけで呼ぶというのはやめてほしい。

「そう。じゃあ、澪。これからのことなんだけ……」

そうアリスが楽しそうに切り出したところで、変化があつた。家の外から空氣を切る音が聞こえてきたのだ。それはだんだん大きくなってきて、思わず私は外の方を見た。

「……はあ」

アリスは心底面倒くさそうにため息をついた。その次の瞬間、アリスの家の玄関が開き、外から人が入つてきた。

「ういーっす！　アリス、元気にしてるかー？」

誰だらう。悪い人かな。私は立ち上がり、アリスの前に出る。いざとなつたら、盾にならなきや。

「うん？　なあアリス、その子誰？」　アリスの子供？」

侵入者の問いに、アリスは肩をすくませて首を振つて答えた。

なんだろう、アリスに警戒心がない。もしかしてアリスの家族なのだろうか。そう思つて、侵入者をよく見る。

大きな三角帽子をかぶり、さながらエプロンドレスのよつたデザインの服に身を包んだ、金髪の綺麗な人。アリスとはまた違う綺麗さだった。アリスを人形の美しさに例えるなら、この人は自然の美しさ。雄大で、凜々しくて、それでいてしなやかで。だが、アリスに似ているかどうかで言えば、そうではない。……でも、やっぱり家族かもしれない。私も、お父さんにも母にも似ていないと言われてばかりだったから。

「澪、こいつは魔理沙。霧雨 魔理沙よ。」

まりさ。キリサメマリサ。独特な名前だな。私はそう思った。アリスの知人だということがわかると、私は警戒を解き、ソファに座る。足の裏を見ると、血がにじんでいた。急だったので忘れていたが、私は怪我をしていたんだつた。気をつけないと、傷口が開いてしまうかもしれない。

「私は星空澪と言います。アリスのご友人ですか？」

私がそう聞くと、マリサは不思議そうな顔をしたあと、大口を開けて笑つた。

「あはははは！ ご友人だつてよ、アリス！ あたしでもそんな言葉使わねえのによくできた子供だな！」

マリサはひとしきり笑うと、私の頭に手を乗せた。

「別に敬語なんて使わなくていいんだぜ？ 子供は、子供らしいだけで可愛いもんなんだからな」

「私は、可愛く見せたくて敬語を使つてるわけじゃないよ」

相変わらず、私の表情筋は機能を果たさなかつた。でも、私は喜んでいるのだ。無理することはない。そう言ってくれたような気がして、嬉しくて。

「私、普通に話していると無感情だと言われるから。敬語の方が、そう言わることが少なくて」

私は感じていないのであるのだ。ちゃんと痛いも苦しいも、嬉しいも楽しいも感じる。だが、このことについて言葉を尽くして説明して、誤解が解けた試しがない。だから私は、このことに関して他人に理解してもらうことを諦めた。

「そうなのか？　ま、やつぱり敬語よか親近感湧くよ。さつきよりも百倍いい。今度新しい人に会つたら、そつやつて自己紹介したらどうだ？」

「う、うん」

ちょっと馴れ馴れしく感じて、返事が遅くなってしまった。これが、この人の普通なのだろうか。少し疑問に思う。

「……で？　何の用？　魔導書なら貸さないわよ」

アリスはつっけんどんにそう言つた。魔法使い、なのかな。

「ああ、貸さなくていいぜ。パチュリーんとこから貸してもらつから」

「あんたの場合は盗み出すでしょうが。早く用件を言へなさい」

アリスがイライラとしながらそつそつと、マリサは肩をすくめた。

「せつかちだな、アリスは」

「いいから」

「わかつたよ。靈夢が呼んでるぜ」

その用件に、アリスは訝しげな表情をした。レイムという人に会うのが嫌なのだろうか。

「なんである子が？」

「行けばわかるぜ。来るか？」

頷いて、口を開こうとして、アリスは私を見た。

「この子がいるわ。だから」

「私、ここで待つてる」

「一緒に連れてけばいいじゃん」

私とマリサは全く別の意見を言った。一緒になんて行つても、足でまといになるだけなのに、この人は何を言つてるのだろうか。

「わかつたわ。さ、澪。魔理沙の後ろに乗つけてもらいなさい」

「……。うん」

アリスは私を抱き上げて、外まで私を連れ出した。外には少し大きめの幕が立てかけられており、マリサはそれをひつつかむと跨った。この人は何をしようとしているのだろう。そしてどうしてアリスはマリサの後ろに私を乗せたのだろう。

気恥ずかしさで消え入りたくなるような気持ちになつているといふのに、マリサは朗らかに言うのだ。

「じゃ、飛ぶから口閉じとけよ。舌噛んじまうぜ」

言われたとおり口を閉じる。体が宙に浮くような嫌な間隔に見舞われ、上から豪風が吹いてきて、思わず目を閉じる。再び目を開けるとそこには田を疑いたくなるような光景が広がっていた。

「こには……」

こには、知らない世界。そう思い知らされた。本で見た世界地図と、共通点が見当たらない。そしてかつて学校の屋上から見た景色とは、まるで違っていた。ビルもなればコンクリートで舗装された道すらもない。あるのは縁とちょっとの家屋。

「きれいだろ？ あたしもこの景色好きなんだ」

「そう」

幻想郷。ここから元の世界に戻れるのだろうか。不安に思つ。もし戻れなかつたら今度こそ一人きりになつてしまつ、と思うと、耐えがたい寂しさに見舞われた。マリサの腰に抱き着きついて、寂しさを紛らわす。

「魔理沙、もうちょっとゆっくり飛んであげたら？ 怖いのかも」アリスの声がしたので、その方向を見る。すると、アリスが何も持たずにマリサと並行して飛んでいた。

「うん、速いか？」

「……うん。でも、このままでいい」

このまま、もう少しだけ人のぬくもりを感じていたい。久しぶりに触れた人の体は、すごく柔らかくて、いい匂いがしていた。人つて、こんなにもよいものだつただろうか。

少し記憶を探つて、自分が最後に人に抱きしめられた、もしくは抱きしめた記憶を思い出す。……吊り下がつた母を下ろす時に、抱えたのが最後だった。嫌なことを思い出した。気分が悪くなつて、吐き気さえしてくる。

「……」

あの時の母は、思い出したくない。綺麗な人ではあつたが、死に顔は凄惨なものだつた。口をだらしなく開き、目を見開き、ありとあらゆる穴から汚物を垂れ流していた母。私が死を忌避するのは、死んだら私もあるなるのだ、と思つてゐるからなのかも知れない。あんな物体になるなら、どれほど苦しかろうと生き抜いて見せる。おそらく私はそう心のどこかで思つてゐるのだろう。

「澪、あれが目的地だぜ」

マリサは赤い鳥居のある神社を指さして言つた。境内はそんなに広くなくて神社そのものも小さめ。あれは、どんな神様を祀つているのだろう。

「どんな神社？ どんな神様を祀つてゐるの？」

「知らね」

マリサはそつけなく言つた。興味がないであらうことは後ろからでもわかつた。

彼女は高度を下げ、その神社に接近する。アリスが先に境内に降り立つた。マリサも彼女に続いて地面に降りると、私のことを抱き上げてくれた。

「遅いわよ、魔理沙！ ……で、そのちつここの何？ 魔理沙の子供？」

神社の中から、肩口が露出した特殊な巫女服に身を包んだ女性が出てきた。黒い髪を後ろでまとめ上げて、大きなリボンで止めている。マリサもアリスも、そしてこの人も。この世界にいる人は皆、彼女たちのような珍妙な格好なのだろうか。

「私、星空澪。今は、アリスにお世話になつてゐるの」

マリサに言われた通り、丁寧語を使わずに挨拶してみる。

「私は靈夢。よく挨拶できたわね、偉いわよ。……魔理沙が抱きかかえてるのはなんで？」

「この子足をけがしちゃって。一人にしつくのもかわいそつだから連れてきた」

アリスが神社のほうへと足を進めながら言った。

「あんまり知らないところを連れまわしても疲れちゃうだろ？」「早く要件を済ませましょ、靈夢」

「わかったわ。神社の中で話しましょ」

レイムは頷くと、神社の中へと歩き出した。マリサも、彼女たちに続く。

「ちょっと話するけど、大丈夫か？」

「大丈夫。ゆっくりお話ししてて。私は考え方しつく」

マリサが呆れたように息をついた。私は彼女を見上げる。

「考え方って。もつと遊んだりとかしねえのか？」

「遊びにも、足がこれじゃあろくに動けない。そもそも私は遊びは必要ない」

「そうかよ。じゃあ、今度あたしが教えてやるよ」

そういってマリサはニカリと笑った。そんな反応をしてくれたのは、この人が初めてだった。

初めて入った神社の中は、意外と普通の家屋だった。畳の上に座らされ、三人は一つのちゃぶ台を中心にして座った。私はすることもないで横になる。眠れればよいのだが。

「で、靈夢。なんで私を呼んだの？」

「この前、あなた外来人を連れてきたでしょ？」

外来人、というのは私のように外の世界から来た人のことを指すようだ。先ほど、アリスに教えてもらつた。

「ええ、それが？」

「最近、外来人が多すぎて、厄介な連中も増えてきたわ」

「……私のせいだと言いたいの？」

「違うわ」

レイムは静かに言うのが聞こえた。

「ただ、外来人を分別なしに保護するのはやめてほしい、ということが言いたいだけ。今日みたいに」

「見捨てたら死ぬかもしれないのに？」

「それもやむなし、という状況よ」

私は全身がこわばるのを感じた。もしかしたら、殺されてしまうのだろうか。体を起こして、三人を見る。

「どうしたの？ 喉かわいた？」

レイムが聞いてきた。優しい女性。でも、もしかしたら私の命を奪うかもしれない女性。

「……なんでもない」

「そう」

聞いても、悪く思われるだけだ。私はまた体を横にして、今度は三人の会話に集中する。

「何かあつたのか、靈夢」

「ここに来るときに力を持った馬鹿が幻想郷で何かしようとしたんで

る、つてだけよ」

「……それが、私がここに連れてきた人だ、つてわけ？」  
アリスが悲しげな様子で言ったのが聞こえた。

「責めるつもりはないわ。ただ、これからは保護するなら保護する、見捨てるなら見捨てるではつきりさせたいってだけ。神社ではもう面倒見きれないわ」

「そんなに多いのかよ？」

「一日一人から二人。十日にはろくでもないのが迷い込むわ」「多いな。あたしんとこには来たことないぜ？」

「あんたはいつも空飛んでんでしょうが」

「はは、それもそつか」

マリサは笑っているけど、私は気が気がでなかつた。この話し合いの結果如何で私はどうこうされてしまつたのだから。  
逃げ出すか？ その選択肢は、すぐに消えた。ここから逃げたらそれこそ絶望だ。

「それはわかつたけど、幻想郷の結界はどうなつてんだ？」  
「それが緩んでるから、大量に外来人が来てるんでしょうが」

「対策はあるの、靈夢」

「幻想郷を外から切り離す」

「今いる外来人はどうなるんだ？」

「結界が安定するまでは、残念だけどここにこもらつことになるわ」

私はほつと胸を撫で下ろした。よかつた。少なくとも、ここにいる三人に殺されることはないんだ。

「この子は？」

アリスが聞いた。どういう意味だろ？

「ちょっと変な能力もつてゐるけど、まあ帰れるでしょ……？」

レイムがしばらく黙りこくつた。

「靈夢？」

「この子、は」

私は違和感を感じて、体を起こした。

「な、なに？」

レイムの目は、なぜか潤んでいた。ゆっくりと私に近づくと、私のことを抱きしめた。痛いくらいに込められる力に、私は戸惑う。

「……あなたは、ここにいなさい。ずっと」

「れ、レイム？」

「どうこうことだらう。 なんでこんなふうに抱きしめてくれるのだらう。」

「元の世界に帰っちゃダメよ」

「なんで？ 説明して。理由もなしに帰るなと言われても頷けない」

私は静かに言った。レイムもきっと戸惑っているのだろう。私の中に思わず涙を流してしまってほど凄惨な何かを見てしまったのだろう。巫女さんなんだから、他人の本質を見抜くくらいはできるだろう。

「おい、靈夢。何勝手なこと言つてんだ？」

「二人に頼みたいことがあるの」

「私を解放し、涙を拭うとレイムは一人に向き直った。

「あなたたちを呼んだのは、さつき言つたことを各地にいる主要人物に伝えて欲しいの」

レイムがそう言つと、二人は訝しげな顔をした。

「……はあ？ なんで私が？」

「なんであたしなんだ、靈夢」

「信用に足るからよ」

レイムは私の隣に座ると、説明を始めた。私のことではうやむやにしたのに、このことではちゃんと説明するのか。もしかしてこの人の中で何か線引きがあるのだろうか。

「外来人を保護するか否かは発見した本人に委ねる。これはある意味で危険な案よ。無差別に広めれば、それは外来人への襲撃を公的に認めたと捉えられかねない。そんなことは、避けなければならな

いわ

レイムは袂に手を入れると、その中から紙を取り出した。そこには地図のようなものが描かれていて、レイムはそれをちやぶ台の上に乗せた。

「だから、注意して伝えて欲しいことがあるの。これは決定事項ではないことと、外来人を襲うことを認めるわけではないということ。それから、これは試験的運用でもあるから、信頼できる部下にのみ伝えてほしいということ。以上の三点よ」

穴がある。私はそう思った。けれど、それは落とし穴と同じで、人為的に作られたものだ。そう感じた。

これがもし全面的に広まつたとしたら、悪意を持つ人間は確実に外来人を食い物にするだろう。それを問題視させないための試験運用なのだろうか。それとも、騙すための試験運用なのだろうか。

こんなことをして、騙す相手は誰だろう。外来人だろうか。ここにいる一人だろうか。それとも、幻想郷の人間全てだろうか。

「わかったぜ。さとりとか紫とかレミリアとかに伝えればいいんだろ？」

「よくわかつてんじやない。よろしくね」

レイムは優しく微笑んでそう言った。私は半ば無理にでも立ち上がつた。足の裏に鋭い痛みが走る。

「大丈夫、澪」

「うん。アリスも行くの？」

アリスはしばらく悩んでから頷いた。なぜ悩んだのだろう。

「じゃあ、私も行く」

「……危険よ？」

「それでも行く」

私はアリスのそばまで痛みを我慢しながら歩く。

「あなたは、ここにいなさい」

「ここはイヤ。行く」

レイムと一緒にいるのは、少し嫌だった。レイムと一緒にいた

ら、最後には閉じ込められてしまうのではないか、そんな恐怖が全身を襲つたからだつた。

「……そう。嫌になつたらいつでもここに来なさい」

レイムは残念そうにはしていただけど、特に怒つたような様子や、壊れてしまつのような様子はなかつた。私は安心すると、アリスの方を向く。

「最初はどこへ行くの？」

私が聞くと、アリスはマリサと田を見合せた。

「私はこの近くにある紅魔館に行くわ。各地に伝え終わつたら、伝書鳩を飛ばすから。あなたもそうして」

「ういつす。じゃああたしは天子んとこ行つてくるぜ」

マリサは駆け出して外に出ると、簾に跨つた。

「ごめんな、澪。遊び教えてやれなくて。でも今度会つたら絶対教えてやるからな！　じゃあな、元氣でなー！」

そう言い残すと、返事も聞かずに行つてしまつた。まるで、嵐か台風のような人だつたな。

「私達も行きましょうか。歩ける？」

頷くと、一步踏み出す。傷をかばう歩き方をしたせいか、かくりとバランスを崩し、膝をついてしまう。

「大丈夫？　見せてみて」

「大丈夫、歩けるから」

私は強がつて言つた。もしここで足手まといだと思われたら連れて行つてもらえないかもしない。そんなことになつたら、私はレイムと二人きり。そんなのはイヤだつた。

それにしても、なぜ私はただの想像を根拠にこれほどレイムを嫌うのだろう。私は、偏見で人を判断するような人間にはなるまいと思つていたのに。

「靈夢、子供用の靴とかある？」

「ないわ」

だから、ここにいて。そう恫喝されたように感じて、私はアリ

スの後ろに隠れた。恐らく私は何かをレイムに感じ取つて、それを恐れているのだろう。愚かな私。

「……えらく嫌われたわね、靈夢」

「まあ、私子供受けよくないから。それじゃあね、アリス、澪。また会いましょう」

そう言つとレイムは神社の奥の部屋に消えていった。

「足、どうする?」

「歩く」

「傷開くわよ?」

「構わない」

とにかくここから出たい。こんなにも一つの場所を恐れる自分に憎悪さえ抱く。レイムだつて私を迎えて入れて、抱き締めてさえくれたのに、なぜ私は恐れるのだろう。よくわからない。わかりたくないような気がする。

「はあ。あなた、頑固ね」

「足手まといにはなりたくない」

アリスはまたため息をついた。怒らせただろうか。

「もう。わかつたわよ。急ぐ用事でもないでしょ?、ゆっくり行きましたよ。辛くなつたり痛かつたりしたら言いなさい」

「ありがとう」

私はお礼を言つと、境内を素足のまま歩く。おもわず叫びそうになるくらい痛むけど、嫌われたりするわけにはいかないのだ、黙つて歩く。アリスと一緒に境内を出て、階段を降りる。それからは、土がむきだしになつた街道を歩く。

「澪、紅魔館に行つたら次は永遠亭に行くわよ」

「永遠亭?」

なんだろ?、その素敵な響きは。永久を手に入れれる場所、とかならば素晴らしい場所だな、と思つ。

「病院よ。流石にちゃんとした医者に見てもらいたいでしょ?」

「病院、か。お父さんに行くなと言われてからは、行つていない。」

大病を患えば死が確定するが、お父さんが言つのなら、別にそれでもかまわない。

「病院はいや？」

「つうん。久々だな、って思つて」

「へえ。具体的には？」

「四年くらい」

アリスは驚いた。

「すごい。怪我もしなかつたの？」

私は首を振つた。

「行かなかつただけ」

「え、お父さんとかは？」

私は首を振つた。大人なら、これだけで理解してくれるはずだ。

普通の人に、私とお父さんとの絆は理解できないだろうから。

「う」「ごめん」

「いい。謝つてくれるだけ、嬉しい」

お父さんは死んだ。そう伝える方が、お金だけ送つて来てあとは放つたらかしというのよりも理解されよい。お父さんとのことで嘘をつくのは気が引けるけど、こんなことでそうダラダラと会話するのもイヤなので、私は話を切り替える。

「紅魔館つて、どんなところ？」

「え？ ……吸血鬼、レミリア・スカーレットの住居よ」

吸血鬼。血を吸いとる鬼。そんな恐ろしい存在がいる場所に自ら足を運ばねばならないことを、私は嘆いた。

「怖い？」

「うん。でも大丈夫」

私は上手く踵をかばいながら歩く。ひょこひょこと変な歩き方になつてゐるが、アリスは笑おうともしない。優しい人だな。

「ふうん。まあ、ほんと無理だけはしないでね」

「うん」

吸血鬼つてどんなのなんだろうか。それこそ、人を食糧にしか

見てないような、そんな存在なのだろうか。……私、外来人だし、食べられるのかな。

「まあ、すぐには紅魔館に着かないし、ゆっくりおしゃべりでもしながら行きましょ」

「うん」

暇しないように配慮してくれるのが、嬉しかった。この気持ちを笑顔で表現できない自分が恨めしい。

「アリス、ここは妖怪がたくさんいるの？」

「まあね。でも大丈夫よ。私が守るから」

そう言ってアリスが指をひらめかせると、周りに浮いていた人形達の手に様々な武器が握られていた。斧や槍、剣などの恐ろしいものを可愛らしい人形が持っているのが、不気味だった。

「それで、殺すの？」

「殺しはしないわ。撃退するだけ。まあ」

「人間だー！」

甲高い声が聞こえた。周りが闇に閉ざされる。まだ昼間だとうのに、なぜ。

「あなたは、食べてもいい人間？」

声が聞こえる。想像するに、女の子の声だ。年齢は私と同じくらいの、小さい子。その子は、きっと今私の後ろにいる。息が右の耳にかかるほど、近い場所。多分、この子は妖怪だ。人を食うような、怖い妖怪。おそらく私の心臓の鼓動さえ、気取られているのだろう。

なんと答えたら、助かるのだろう。なんと答えたら、殺されてしまうのだろう。

「答えて？　あなたは、食べてもいい人間？」

彼女の問いにどう答える。肯定する？　その場で齧られ、食われてしまうかもしない。否定する？　もしかしたらこの質問はただ趣味で聞いてるだけで、嫌がる人間を食うのがいい、とか言われるかもしない。

「答えないの？ 食べちゃうよ？」

「やめなさい。ルーミア、その子は食べてはいけない人間よ。手を出さないで」

暗闇の奥から、アリスの声がした。

「そーなのかー。じゃあ、かえるのだ」

そう言うと、子供の妖怪……ルーミアは去つて行つた。闇が晴れ、視界が戻つた。一步も動かなかつたため、景色は変わっていかつた。勝手に移動させられたということはなさそうで、よかつた。

「大丈夫、澪」

アリスが私のそばに駆け寄つてくれた。よく見ると私の周りに人形がたくさん浮いている。ござとなつたら、あの妖怪と戦つてくれたのだろうか。

「うん、大丈夫」

「驚いたわ。普通の子は驚いて騒いだり走つたりして大変なことになるのに」

アリスは歩きながら感心するように言つてくれた。私はアリスについて歩く。足の痛みにもなれた。

「私は、いつでも冷静だから」

「そうね。でも、怖くなかった？」

私は素直に答えることにした。

「もうここで食べられて終わっちゃうんだって思つた」

「そんなこと思つてたのによくじつとしてられたわね」

「生きるためなら、なんでもする」

私は静かに言つた。この先泥水をすするような日に遭つても、生き抜く。

死にたくないから。母と同じになりたくない。またお父さんと会いたい。だから、死ねない。

「随分と固い決意ね。すごいわ」

「ありがとう、アリス。……ところで、ルーミアはどんな妖怪なの

？」

私は質問してみた。今度一人でルーミアに遭つても死なないようにするための、情報が欲しかつたからだ。

「あの子は闇を操る人食いよ」

「私を食べようとしてたのかな」

アリスは奇妙なことに首を振つた。

「まあ、そななんだけどね。でも、無理矢理食べられたりしないわ。あの子、食べてもいいか聞いて、許可がもらえないと食べてこないから」

「どうして、妖怪なのにそんなルールに縛られてるの？」

私の中の妖怪という存在に対するイメージは、自由奔放、気まぐれで人を殺したり救つたりするような強大なものだつたのに。随分と、イメージと違う。

「まあ、どんな妖怪も多かれ少なかれルールの中で生きてるわ。もちろん、そのルールを破る奴もいる。……そこは人間も一緒でしょ？」

私は頷いた。

「わかつてくれて嬉しいわ。で、ルーミアはルールに縛られているタイプの妖怪よ。ルーミアに食べられたくなかったら、私は食べてはいけない人間です、って言えばいいのよ。簡単でしょ？」

頷く。なんだ、変に深読みをしてしまつた。そんな単純なものだつたら、素直に答えるべきだつたな。情報がなかつたのだから仕方ないといえば、仕方ないのだろうが。

だが、これからは情報を多く取り入れるよう注意しなければ。知らないことが理由で、死にたくない。

「アリス、話は変わるけど、外来人つてどんな人がいるの？」

すると、アリスは困つたような顔をした。聞いてはいけないことだつたかな。

「ううん、多すぎで一概には言えないわ」

「じゃあ、たとえば、外来人が近づいてはいけない場所とか、しちゃいけないこととか、ある？」

「この質問にも、アリスは言葉を濁すだけだった。

「まあ、ないことはないけどね。あなたにはどう頑張っても無理だから安心して過ごしなさい」

「なんにもないの？」

アリスは少しためらつて、頷いた。

「まあ、そりや入つたら怒られちゃう場所はあるけど、それも外来人だから、で特別に案内するとかあるから……」

私は驚愕する。なぜこんなにもここの人は警戒心がないのだろう。そんな私の疑問を感じ取ったのか、アリスはにっこりと笑った。

「ここの人、基本的にお人よしが多いから

「そりなんだ」

私はそう言うのとほぼ同時、道が開け、視界いっぱいに湖が広がる。思わず、声が漏れる。これほどきれいな景色を、私は見たことがない。そして、湖の奥には赤い館があった。

「あの奥にあるのが、紅魔館。さ、行きましょう」

アリスは湖の円周沿いに歩き始めた。

## 紅魔館への道のりと私

綺麗な湖を眺めながら、私とアリスは歩いていた。舗装されていない道を歩くのは辛いけれど、我慢する。だんだん慣れてきたし。左側にはアリスが歩いていて、その背景にな森と青い空があつた。右を向くと、目を見張るような美しい湖が見える。

水面は光り輝く網をはつたように太陽の光を乱反射し、まぶしいくらいにきらめいている。湖の水は、ここからでも中心の底を見れるんじゃないのかと思うほど透き通っていた。

「この湖、おきにいり？」

「私はこの景色を美しいと思う。だから、好き」

アリスの方を見る。

「素直にキレイだから好きって言えばいいのに」

アリスは苦笑しながら言った。

その様子は、まるで親しい人間にするような、柔らかい顔だった。私がアリスの家族になったかのような錯覚に陥り、それを振り払おうと首を振る。

「どうしたの？　また何か理由があるの？」

「違う。アリスと家族になったような感覚がして。それを頭から振り払っていた」

アリスはしばらく悩むような仕草をした。やはり、気持ち悪がられただろうか。せっかく仲良くなれたのに、残念だ。

「別に、いいけど」

「……？」

「いい？　何がいいのだろうか。

「別に、家族になつてもいいよ」

「……本気？」

「私に新しい家族ができる？アリスが、こんなに優しくて綺麗な人が私の家族に？」

「本気も本気」

「……なぜか、聞いてもいい？」

アリスはしばらく顎に手を当てて悩んだ。本人もわかりかねているのだろうか。しつかり悩んで、結論を出して欲しい、半端な考えで家族になつて、いるないから、で捨てられるのは嫌だから。

「私、あなたを助けるつて決めたから。靈夢が言つには長いこと滞在してもらわなきないけないのよね。その間ずっと一緒にいるわけだし、それつてもう家族と一緒にでしょ？」まあ、あなたが帰るくらいまでなら、ね」

私はすぐに頷くことができなかつた。家族が一緒にいるのが当たり前かのように言われて、戸惑つたのだ。やはり私はおかしい。そういう再認識した。

「私、アリスの家族になるの？ なつていいの？」

「ええ。この際だし、別にいいわ。でもちゃんと帰るのよ？」

ああ、なぜ私は笑顔や仕草で喜びを、この全身を包む幸福を表現できないのだろう。

私は自分のできる精一杯として、アリスに抱きついていた。

「ありがとう、アリス……お姉ちゃん」

「お母さんと呼ばれる覚悟だつたんだけど……。まあ、いいか」

アリスは照れ臭そうに頬をかくと、まあ、家族だしね、と言つて抱きしめてくれた。

お母さんではだめ。お母さんと呼んでしまえば、アリスも母のようにな……。

「澪、震えてるわよ？」

「嬉しくて。喜びに打ち震えるというものだと思つ」

私の言い訳を、アリスは信じてくれた。私はお礼を言つてアリスから離れる。私は震える体を無理に動かし、湖の奥に見える紅魔館を目指す。

「澪、どうしたの？」

すぐにアリスが追いついてきた。

「なんでもないよ」

吊り下がつた母の遺体が思考の端から消え、体の震えが止まると、私はアリスのそばに行つて手を繋いだ。姉妹はこうするものだと思つたからだ。

「おー？ アリスじゃない！」

紅魔館へ進もうとしたとき、声がした。私達の目の前に氷の粒が集まつて、それは人型をとり、やがては一人の女の子になった。

その子は短い水色の髪に、水色を基調としたブラウスを着ていて、背中には三対の氷柱が翼のように生えていた。

「ここにちはチルノ。用事があるからあんたの相手はしてやれないの。どつかいって」

アリスは冷たくあしらうように言った。

アリスが誰にでも分け隔てなく優しくするような人間でないことがわかつて、少しだけ安心する。

聖女と共に暮らす自信はない。

「私が相手してほしいのは、そこの人間なのだ！」

チルノ、とアリスに呼ばれた子供は私のすぐそばまで来て言った。空気が急に冷え込んだような気がする。私の本能が警鐘を鳴らしているのだろうか。

警告に従い、私は何歩か後ずさる。

「おー。なんの力も持つてない人間だ。名前は？ あたいは『氷精』チルノ！ 氷を自在に操れるのだー！」

氷を、自在に？ そんなもの、人間が、少なくとも私が叶う相手じゃない。なんとかして生き残らなければ。どうする。

「私は星空澪」

アリスの名前を名乗りたかったけど、教えてもらつていなから名乗れなかつた。あとで聞こう。生き残れたら。

「ほー。星空か。いい名前だな！」

「澪つて呼んで」

チルノはあつさり頷いた。

「わかつたぞ、澪！ さあ、弾幕勝負だ！」

そんなことを言つて、チルノはいきなり攻撃してきた。氷粒が

いくつも、無数に飛んでくる。

知覚はできている。ちゃんと見えている。けれど、避けれない。

私はまだまだ未熟な上に華奢だ。怪我もしてる。

氷の弾の雨にさらされた私は、後ろに吹き飛ばされて地面上に転がる。お腹が痛い。体がうまく動かない。

「チルノ！ あんた何してるの！？ いきなり撃つとか何考えてるのよ！」

「い、いやまさか本当に何もできないなんて思わなくて、あつせりよけて反撃するんだとばかり……」

「あんた澪の力量見切つてたでしょ！？」

「あ、あれは、その、なんていうか……」

「なによ」

「当てずっぽう……」

「ああ、もう！ とつとと失せろ！」

「わ、わかつたのだ。」「ごめん澪。」

それきり、チルノの声はきこえなくなつた。アリスが駆け寄つてくる音がした。

「大丈夫澪！？ お腹見せて。内出血してわね。痛い？」  
抱き起こされ、聞かれる。正直、傷みはもう引いている。

「チルノのこと、許してあげて」

「はあ？ なんの澪があいつを庇うのよ？」

「あの子はきっと、ただ子供なだけで、普通に悪気があつたわけで

はないはずあから」

悪意があれば、去り際謝るなんてことしないだろ？ し、そもそも私は死んでいるだろ？

「優しい子ね」

私はそう言われて嬉しかった。ここに来る前はなにを言つても何をしても、誰も何も言つてくれなかつた。気味が悪いといって近づ

いてもくれなかつた。

それなのに、ここの人達は。

「ありがとう、アリスお姉ちゃん。もう歩けるから」  
自力で立ち上ると、ふらつきながらも歩き出す。アリスも心配  
そうについてくる。

「そうだ、アリスお姉ちゃん」

「どうしたの？」

私は紅魔館を見つつ、アリスに聞く、

「アリスお姉ちゃんの名字はなんていうの？ 私、お姉ちゃんの名  
前を名乗りたくて」

星空。こんな名前、いらない。いくらお父さんの名前でも、関  
係ない。お父さんとは血が繋がっているんだから、名前が違つても  
繋がつていれるはずなんだ。だったら、こんな名前は、捨てる。

「マーガトロイドよ。そんなに名前が嫌？」

頷く。私は今から、澪……。

ミオ・マーガトロイドだ。少なくとも、この幻想郷にいる間は。

「じゃ、行こうかアリスお姉ちゃん」

「わかつたわ。ホントに大丈夫？」

「大丈夫」

私はそう言つと、少しだけ歩む速度を上げた。傷みが増してくる  
けど、構いやしない。

歩いてからかなり経つて、紅魔館の門が見えてきた。遠くで見た  
ときはそもそもなかつたのに、今見ると物凄く大きな館だ。壁から  
屋根、窓枠に至るまで全てが朱色に染められているところは、さす  
が吸血鬼の住処だ、と思つた。

「ここにちは、アリス。今日はどんな御用ですか？」

赤く染まつた門の前には、中華風の衣装に身を包んだ女性がいて、  
アリスにそんなことを聞いた。門番さんだろ？。ここまで大きい館  
なら、門番くらいはいて当たり前なのだろうか。

「今日はレミリアに伝言があつて来たわ

「……伝言？」

「ええ。靈夢からの大切な伝言よ。通してもいいえる？」

「……何か書類はお持ちでしょつか」

「持つてないわ」

そうアリスが言つと、門番は少々お待ちを、言つて門の中に入つた。話し声が聞こえるのでおそらく内線か何かで主と連絡をとつてゐるのだろう。

「妙に嚴重ね」

「いつもは違うの？」

アリスが不思議そうにしていたので、聞いてみた。すると訝しげな顔をしたまま、私に教えてくれた。

「いつもは用件言えば大抵通してくれるのよ。そもそも昼寝していることもあるし」

「門番がそんなので大丈夫なの？」

「まあ、こここの主は強いから。ちょっと腕に自信がある、くらいで忍び込んだところで夕食にされるだけだからね。……まあ、今日は様子が違うのだけど」

「どうしてだと思う？」

アリスは肩を竦めた。興味がないのだろうか。もしかして、アリスはあまり他人に興味がない？

「お待たせしました。通つてよい、とのことです。それでは、お通りください」

門から出てきた門番は、私たちを中へと案内した。

「ありがと。美鈴」

「いえ」

そう言つて恭しく一礼したメイリンという女性は、私たちを見送ると再び門番としての仕事を果たすため、門の外に立つた。

クールビューティという言葉が彼女ほど似合いそうな人は、今まで見たことがなかった。

「どうしたの？ 美鈴の方ばつか見て」

「……なんでもないよ」

私はアリスに促され、ちゃんと前を見る。赤い大きな扉が目に入つてくる。この先に、吸血鬼がいるのか。

思わず震えそうな体を感じながら、私はアリスについていく。無意識的に、ぴつたひと寄り添うように歩く。アリスは私を見てにこりと微笑んで、扉を開けた。

「いらっしゃいませ、アリス様。お嬢様がお待ちです」

広々としたエントランスの中央で、メイド服にみをつつんだ人形のような女性が待っていた。彼女は綺麗なのは綺麗なのだが、なぜだか、背筋が凍るような悪寒を感じた。

「……はじめてまして」

そう私に言ったメイドの瞳は、夕日のような真紅だった。

真っ赤な扉が等間隔でいくつも続く、真っ赤なカーペットが敷かれた廊下を、私とアリスはイザワイサクヤというメイドに先導され歩いていた。

「……ね、ねえサクヤさん」

「なんでしょうか」

冷たい声が浴びせられる。体の芯から冷えるような感覚がして、少し震える。怖くなつて、アリスの手を握りしめた。

「あ、あなたは、吸血鬼……なんですか？」

「……あ……。そうです、とも言えますし……違います、とも言えます」

「どうしたことなのだろう。……ハーフなのだろうか。いわゆるダンピールという人種。

「……興味があるのですか？」

「え？」

「吸血鬼に」

私は首を振つた。サクヤは前を向いているから、話さなくてはならないことに気づくのに、しばらくかかつた。

「う、ううん」

「そうですか」

サクヤの声が怖い。まるで、調理台の上に乗つていいと言われたら、そんな嫌な気分。

「ねえ、咲夜。あなたはもし外来人を好きにしていいと言われたら、どうする？」

「なんで、アリスは今そんなことを言つるのだろう？ 反応が気になるのだろうか。サクヤはここで初めて、振り返つて私の方を見た。視線だけで、貫かれたような気分になる。

「その少女を私に……。そういう意味ですか？」

「違うわ。どうするか知りたいだけ」

「この人はどんな反応をするのだろう。お願ひだから、普通の反応をして。そう心の底から願う自分がいた。」

「そうですね。もしそのようなことになつたら、お嬢様と妹様の食材を安定して調達できますね」

思わず、アリスの後ろに隠れてしまった。

「ちょっと、澪？ どうしたの？」

「……な、なんでもない」

アリスの影から、サクヤを見る。普通の女人にしか見えない。だけど、人とは違う何かを、この人は備えていた。

廊下の一番奥にある大きな扉の前まで来ると、サクヤは静かにノックした。

「お嬢様。お客様をお連れ致しました」

「わかつたわ。お通しして」

扉ごしだというのに丁寧に礼をしたところを見ると、この人の主人に対する忠誠はかなり高いものだということがわかつた。サクヤは重そうな扉を片手で開けると、私たちに中へ行くよう手で促した。中に入つても私はサクヤに対する恐怖が消えず、彼女の方を見ていた。

「それではお嬢様、失礼致します」

「ええ。ご苦労様」

「ありがたきお言葉」

私達が部屋に入ると同時に、サクヤが消えた。足音一つさせずに消えるなんて。暗殺者か何かなのだろうか。

「ようこそ、アリス。久しぶりね」

私はここで初めて、紅魔館の主を見た。

王様が座るような赤い豪奢な椅子に座つているのは、私と同じかそれより下の年齢に見える、幼い女の子だった。西洋人形のように整つた顔立ちをしていて、ネグリジェのような服装が、幼さを一層引き立てている。この子が、吸血鬼。私達人間を食らう、化け物。

彼女は私を見て、舌なめずりをした。背筋に冷たい汗が流れる。

「……あら、お土産？ 気が効くじゃない」

「違うわ、レミリア。外来人で、私の妹よ」

「へえ」

レミリアという吸血鬼は、興味深そうに立ち上がり、私のすぐそばまで来た。レミリアの顔が、視界いっぱいに広がる。全身が恐怖で凍りつき、レミリアの紅い瞳から目が離せない。殺されてしまうのだろうか。臓腑を撒き散らし、私を咀嚼するレミリアを想像する。その様は酷く似合っていて、神秘さえ醸し出していた。

「……あなた、私のことが怖くないの？ 吸血鬼だってわかってるのに」

「怖い」

そう言つた私を、レミリアはじつくりと観察する。何を見られているのだろう。全てを見られているのだろうか。

「この子、面白いわね、アリス」

「面白い？」

アリスがレミリアに聞いた。怖いと言つた私を気遣つてか、レミ

リアの前に立つてくれる。私はすかさず、アリスの後ろに隠れる。

「そうね。心拍数も呼吸も体温も全て、恐怖を感じた時と同じものなんだけど、表情だけは平静そのもの。眉ひとつ動かさない。でも、怖いのよね」

にやりと、レミリアは嫌な笑みを浮かべた。

「うん」

頷いた私に、すつとレミリアが青白い指先をのばした。顎のラインをなぞるように動く指。恐怖からか、くすぐつたいからか、背筋が凍るような感覚がする。

「随分と、うまく表情を殺すじゃない。どれ、ちょっと運命を……」

そう言つたレミリアの顔色が変わった。私の顎にあつた手が離れ、それは彼女の美しい口元に。

「あなたの運命は……凄まじいわね」

「運命？」

私は首をかしげた。

「そう、運命。いずれ来るべき未来。避けることのできない決定事項。私はそれの一部を読むことができ、ある程度の干渉もできる」私は黙つて話を聞く。聞きたいことはあるが、それは全てレミリアが話終わつてからだ。私の命は今、レミリアが握つてているのだから。

「あなたの運命は強力すぎて微調整すらできないけど……」

そう言つと、レミリアは私の耳元に口を近付けた。耳たぶを齧られると思つた私は、一步下がつた。

「とつて食いやしないわ。内緒話がしたいだけ」

そう言つと、もう一度レミリアは口を私の耳元に近付けた。彼女の冷たい吐息が耳にかかるすぐつた。思わず声を出してしまいそうになるのを、必死で抑える。

「これからきっと、死を懇願したくなるような目に遭うわ。そうなつたら、一人でここにいらつしやい。楽にしてあげるわ」

その言葉が、心の奥の奥まで染み渡つた。ような感覚がした。そして同時に、得体の知れない根源的な不安が、全身を包んだ。

「どういつ、こと？」

「それは、来てからのお楽しみ」

そう言つたレミリアの言葉が、足の先から頭の上まで駆け巡つた。気持ちの悪いような、でももつと聞いていたいような、不思議な感覚だつた。

「……ふふふ。で、アリス。どんな伝言なの？」

私から離れると、レミリアは子供のように笑いながらアリスに聞いた。レミリアの声がもう少しだけ聞きたくなつて、思わず一步前に出た。

「……外来人の処遇に関してよ」

「何？ 絶対に保護しなきゃいけなくなつたの？」

不快そうにレミリアは顔を歪めた。その顔すらも美しく思えた。

私はこの時、自分の異常に気付いた。最初は恐怖の対象でしかなかつたレミリアが、非常に魅力的に、あるいは神秘的に感じるようになつてゐるのだ。

私の感じていた恐怖は、心を歪ませてでも解消しなければならぬほど強くはなかつた。にも関わらず、私の中の感情は劇的といつほど変化していた。なぜか。

「逆よ。必ずしも保護する必要はなくなつた、といつゝことな

「へえ、それは重畳。実に喜ばしいことだわ」

皮肉めいたその言葉をもつと聞いてみたいと思う私は、おかしい。なぜ。私はレミリアに好意を持つてゐる？ 血を吸う鬼を好きになるなど。

「無差別にやつてはダメよ」

「わかつてゐるわ。伝言ご苦労様。それじゃあね、アリス

「ええ」

アリスが踵を返し、部屋を出ようとすると、私はすつと、レミリアを見ていた。視線が彼女から離せない。ずっと、見ていたい。

「澪、何してゐるの？ 早く行くわよ」

「え、あ、うん……」

私は名残惜しげに、レミリアから視線を外し、アリスのそばまで歩いた。

「咲夜。お客様がおかえりよ」

レミリアがそう言つて手を叩くと、私たちのすぐ前にサクヤがいた。恐ろしい思いは、すぐに全身を包んだ。

レミリアには好意を、サクヤには嫌悪と恐怖を抱く自分に不安を感じる。何かされたのだろうか。……レミリアに。

「館の外までご案内します」

「よろしく、咲夜」

外に出たらアリスに相談しよう。優しいアリスのことだ、きっと、相談に乗ってくれる。

私は淡い期待と共に、サクヤと一緒に外へと向かつた。

レミリアに対する好意は、歩く度に強くなつていつた。自分の意  
思とは関係なく強くなつていく気持ちが恐ろしい。

そして、好意や恐怖を感じる自分と、こうして冷静に自分を考え  
ている自分との距離が離れていつているような気がするのが、妙に  
気になつた。

## 感情の変化と私

アリスに相談しようにも、どう切り出せばいいかを悩んでいる内に、私はついにその機会を逃してしまった。つまり、私はレミリアに対する好意を消したくないと思うほどになっていた。

レミリアに会えない寂しさを感じながら、紅魔館を出てしばらく歩いたところで、神社から素足のまま歩き通しの私の体に限界が来た。足から力が抜け、砂利だらけの道に思い切り膝をついてしまう。

「澪、大丈夫！？」

アリスが私の顔を覗き込んでいた。これがレミリアの顔だつたらどれほどよかつただろうか。

そう心の底から願う自分が恐ろしかった。一体、何をされたのだと私は。

「大丈夫。足から力が抜けただけ。何も問題はない」

「大有りよ！……って、あなた」

私を覗き込むアリスが、驚愕に目を丸くした。

「あなた、目が」

「どうしたの？」

紅い。そう言われて喜びを感じたのは、レミリアに好意を寄せる自分だった。絶望を感じたのが、冷静な自分だった。

「目が、紅い」

「そう、真っ赤よ？……わたくしレミリアに何かされたの？」

「多分」

アリスの肩を借りて、立ち上がる。足の裏が痛むが、この痛みは覚悟していてるので、もはや問題ではない。問題なのはむしろ、もはや恋心や、愛と呼べるほど強まったレミリアへの好意だった。まさか、人間の男性に恋する前に吸血鬼の女の子に恋をするなんて。なんて、数奇な。

「何をされたの？ 今、どんな感じ？ 説明できる？」

「……わからない」

「わからない？」

「何をされてるのかは、わからない。でも、どんな感じかは説明できる。曖昧な表現を含むかも。いい？」

頷いてくれたアリスに、私は必死で伝えようと決める。今しかな。今伝えなければ、私の心は彼女でいっぱいになつて、彼女以外の何も考えられなくなるかもしねりない。

歩こうとして、アリスに止められた。

「無理しなくていいから、早く話して」

「……わかつた」

私は口を開いた。

「あの時、レミリアに会つてから私の心が激変している」

「……激変？」

頷いて、続きを話す。

「具体的には言えないけど、レミリアを求めてる。際限のない気持ちが心の奥から湧き上がりってきて、頭の中が溢れてしまいそう。このままでは、彼女のこと以外何も考えられない人形のようになつてしまふかもしねりない」

「……そんな、レミリアが、そんなことを？ あなた大丈夫なの？」私は首を振った。素直な、でもかなりワガママな気持ちを伝える。多分、冷静な自分が頭から追い出された時点で、恐れている瞬間は訪れる。だから、その前に。

「アリス」

「な、何かしら」

会つてからあまり経つていないアリス。私が、こんなことを言つていいのか。悩むけど、言わなければ。今、ここで。

「助けて」

ピクリと、自分の体が震えた。レミリアに対する愛情が、弾けたように強まった。急な感情の変化を、私は受け止めきれなかつた。その場で蹲ると、今こうして冷静に考えている自分を必死に保とう

と努力する。

• !

ドラキュラ。そんな蔑称のような呼称でレミリアを呼ばれたことが、非常に腹立たしく思う。そう思つた自分を見限りたい気持ちを抑えて、ひたすらに溢れる感情から冷静な自分を守る。

「……永遠亭しかないか。澪、急ぐわよ。怖いけど、耐えてね」

そう言うと、私は床に浮いた。急に空に浮かれたというの」「もう恐怖すら感じなくなつていい。田を開じればレミリアが思い浮かび、田を開ければ驚くような早さで景色が流れていく。

うな家だった。

——永琳！急患！」

「エタバタと慌ただしくらいに急いだ様子の着地に、庵の中から左右非対称の色をした奇怪な服をした女人と、ウサギ耳をつけた女子高生のような格好をした女人の人が出てきた。

してのけど消毒すれば……」「

「この子、レミリアに何かされたみたいなの！ 助けてあげて！」  
もはやどうでもよくなつた足の傷を言つたエイリンという女性に、  
アリスは私を差し出すようにして見せながら言つた。

「何?  
わかつたの?」

頷いたエイリンは、静かに私の症状を的確に告げた。

「魅了されかかってるわ、この子。確かに急患ね。じゃ、処置する

からアリスは居間で待つてて

そう言って、私はエイリンに受け渡された。……もづ、限界が近

110

「…………よ、よひし、く、お願ひ……します」

「ええ、わかつたわ。よく耐えたわね。偉いわ！」

二口りと笑つたエイリンを最後に、私は耐えきれなくなつて、冷  
静な自分を失つた。  
でももう大丈夫。そう思えた。

……。

「で？　永琳。レミリアのバカはなんだって澪を魅了なんてしたの？」

アリスの声が聞こえる。なぜかひどく苛ついたような声色だった。「ううん、なんていうかね、この件に関してレミリアは悪くないのよ」

「なんでよ。この子、レミリアに魅了されたんでしょ？」

アリスの怒ったような声が聞こえる。それに、エイリンの声も。彼女は少し申し訳なさそうな声色だった。

「それは間違いないわ。でも、それ以上にこの子の能力が今回の件の原因ね」

「……能力？」

エイリンはアリスの問いに、しばらく答えなかつた。目が覚めきつた私は、目が覚めたことを悟られないよう注意しながら、一人の話を聞く。

「幻想郷の流儀に乗つ取つて彼女の能力を表すなら……『特殊能力を増幅する程度の能力』ってところかしら」

程度？　能力？　……増幅？　嫌な予感がしつつも、私は聞くのをやめなかつた。聞かることはできる。何？　みたいなセリフを言いながら体を起こせばよいのだ。一人とも声を潜めているだ、きっと私には聞かれてくないのだろう。……でも、私はこうして聞いている。

「それが、原因？」

「そう。しかも、彼女の能力は、他者へ干渉する力を持つてないから、必然的に他者から受けた特殊能力を増幅することになるわ」「ようするに？」

「ようするに、支援効果と、敵からの体に留まるタイプの攻撃全て

を増幅することになるわ」

私は何を言われたのか理解したくなかった。つまり、私は。

「……この子、チルノの攻撃食らってたけど」

「体を貰いた？ 違うでしょ？ 体の中に入った時点で増幅されるから、もしあの子の攻撃が澪ちゃんの皮膚を突き破つて体の中に留まつてたら、もしかしたら氷のオブジェになつてたかもね」椅子が弾かれるように動いた音が聞こえた。アリスが驚いて立ち上がつてくれたのかな。

「……レミリアに魅了されかかつてたのは、あの子がレミリアの視線にこもつた僅かな魔力を……」

「増幅し続けた結果、というわけよ。まあ、澪ちゃんの能力はまだ未完成。完成したら特殊能力を食らつたら死ぬ世にも珍しい子供になるわ」

特殊な力を持つてる人つて、この世界にどれだけいるんだろう？ 私はどれだけその人たちと会つのだろう。それが不安だった。

「……そう。わかつたわ」

「理解してくれて嬉しいわ。そろそろ麻酔が切れて起きる頃だから、不審に思われないよう何か話ときましょ。何か話題ある？」

アリスは呆れた感じでため息をついた。

「あんたいつもにまして尊大ね……」

「ま、患者じやないし」

「はいはい、わかつたわよ。……話題はあるわ

「聞かせて貰いましょうか」

「外来人の遭遇について、よ

そろそろいいだろう。私はゆっくりと体を起こした。お腹に感じていた妙な痛みも、足の裏の擦れるような痛みも、私の中についた燃えるような情愛も全て消え失せていた。

私の中にあるのは自分で制御できる正しい私だけだった。ほつと、胸を撫で下ろす。

「あら、おはよう

「おはよう、エイリン。おはよう、アリスお姉ちゃん」

エイリンは診察室のよつた部屋で、お医者さんが座る場所に座つていて、アリスは患者さんか、患者さんの保護者が座る場所に座つていた。私はその隣にある小さなベッドに寝かされていたよつだ。自分の見回すと、パジャマから白い入院患者が着るような服に着替えさせられていた。なぜ、誰が、私の服を着替えさせたのだろう。少し気になる。

「あら、自己紹介したかしら？」

私は首を振つた。

「私の名前はミオ・マーガトロイド。アリスお姉ちゃんの、妹です」私の自己紹介を聞いて、エイリンは目を丸くした。そのまま、アリスに視線を移す。

「この子が、あなたの？」

「何よ。文句あんの？」

「私は、この幻想郷にいる間だけ、アリスお姉ちゃんの家族にしてもらいました」

そう私が言つと、エイリンはさらに驚いた様子を見せて、そして大きく笑つた。

「ふふ、アリス、あなたの数倍、人間ができるわね

「つるさい」

頬を膨らませて、アリスは言つた。

「……外来人の話なんだけどね。これからはそんなに躍起に外来人を保護しなくともいいらしいわよ」

「詳しい話を聞かせてもらえるかしら」

「いいわ」

黙つて話を聞いていた私に、エイリンが何かを思いついたような表情をした。

「あなたはここを好きに見ててもいいわ。地下には入らないでね」どうするかをアリスに目だけで相談すると、アリスは笑顔で頷いてくれた。

「じゃ、こつてきます。ありがとうございます、エイリン」

私はお礼を言つと、診察室の扉を開けて、外に出た。木の廊下に、襖の扉。まるで昔話に出てくるような作りの日本家屋だった。

「あ、目が覚めたんだ。元気になつた?」

廊下の右と左、どちらに行こうか悩んでいる私に、そんな声がかかつた。右を向くと、廊下の奥からウサギ耳をした女人の人と、その人にぴつたりと寄り添つような形で歩いている男の子がいた。男の子は綺麗な顔立ちをしているけど、表情は暗い。私と同じ、入院用の白い服を着ている。

「はじめまして。ミオ・マーガトロイドです。エイリンから地下以外を好きに見て回つてもいいと言われました」

そう言つと、ウサギ耳の女人人は驚いたよつな顔を一瞬すると、笑顔になつて私の頭を撫でた。

「すうい、すうい。よく自己紹介できたね。私は麗仙。で、こつちの子がノーマ」

ノーマと呼ばれた子は、私に小ちく一礼しただけで、挨拶一つしなかつた。

「私は、ミオ・マーガトロイド。よろしく、ノーマ」  
嫌われたのだろうか。いつものことだ。いちいち気にしないことにする。

「あー……。澪ちゃん、この子は口が利けないの」

「失語症?」

確かに、言葉を失うことそう言つたと思う。

「う、ううん、ちょっとと違うかな。なんていうか、口を開かないの。話す気力もない……のかな?」

レイセンの質問に、ノーマは悲しそうな顔をして首を振つた。  
……何か、ノーマにはあるのだろうか。

「筆談は?」

「え?……この子、まだ六歳くらいよ?」

小学校に入る少し前、か。

「でも、他者との『マニケーション』を取る手段が他にないなら努力するはず」

私は、努力した。動かなくなつた表情をカバーできるよつ、必死で言葉を学んだ。幻想郷にくる前までは、その努力が功を奏したことがなかつたが。

「え、えつとね、そんな、先生もなしにそんなことできる人なんて「……それもそうか」

普通の親は文字習得を学校に任せゐる。その学校に就学する前なら、文字が扱えなくとも無理はない、か。

「そもそも、ノーマは親はいた？」

ノーマは嬉しそうに頷いた。その表情が私の心に刺さる。みんな、親がそばにいるのだろうか。お父さんに、会いたい気持ちが強くなつた。

「あ、あなたはどうなの、澪？」

「母はない。お父さんは……いないようなもの」

冷静なまま、私は言った。いつものよつに言葉を濁さなかつたのは、あわよくば同情してほしかつたからだろう。

「う、ごめん」

レイセンは、怒られたと思つたのだろうか。もつと愛想良くなればいいのだが。

「いい。……レイセン、地下以外に行つてほしくない場所、ある？」

これ以上話題を続けたくないで、私は半ば無理に話を切り替えた。

「え？ そうね、一番奥、姫様のお部屋には入らないで欲しいな。それから、厨房も避けてほしいかな」

私は頷いた。……姫様、か。頭に湧いた疑問を疑問のままにして、

私はレイセンとノーマの横をすれ違うように通り抜けた。

「あ、澪ちゃん」

「何？」

私は振り向いた。レイセンと、不安そうな顔をしたノーマが見えた。

「あなた、人里から来たの？」

私は首を振った。

「私は別の世界から来た、外来人」

「そ、それじゃあさ、ノーマと仲良くしてあげてくれない？」

そう言つて、レイセンはノーマを私の方へと押し出した。死んだ魚のような目をした彼は、私が近づくとレイセンの方へと下がつてしまつた。やはり、嫌われた。

「ノーマが私を嫌つてゐる。仲良くすることはできない」

「で、でも」

「それに、コミュニケーション手段を持たない人とは意思疎通が行えない。私はそんな人と友達にはなれない」

そう言つと、レイセンが止める声も聞かずに廊下の奥へと歩き出した。

……レイセンにも嫌われただろう。仕方あるまい。私は私のことを子供らしい子供として扱う人と仲良くなれた試しがない。

「ずいぶん、冷たくあしらうのね」

廊下の奥の、意匠の凝らした襖が開き、中から人が出て來た。この世のものとは思えぬほど美しい女性だつた。十二単のような豪奢な着物に、床まで届きそうな長い黒髪。この人が、レイセンが言つていた姫様か。私は瞬時に理解した。これほど完成された人に、姫様という呼称以外は似合わない。そんな気さえした。

「姫様。どうされたのですか？」

後ろから、レイセンの戸惑うような声が聞こえた。

「かわいらしい声が聞こえたものだから。子供なんて、久しく見てないわ」

そう言つて、姫様は私のそばまで歩いてくる。しゃがんで、私の顔を覗き込む。近づけば近づくほど、姫様の造形の美しさが際立つ。

「あなた、お名前は？」

「私はミオ・マーガトロイド。幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹になつた、外来人」

私の自己紹介に、姫様はクスリと優雅に微笑んだ。

「ふふふ、面白い子ね。私は蓬萊山輝夜。輝夜でいいわ」

カグヤ。そして、姫様。もしかして、この人は。

「かぐや姫？」

「そう呼ばれたことも、あつたわね。何年前かしら」

「この人が、かぐや姫。私が唯一知ってる昔話の登場人物。

「あなたの物語を小さい時に聞いて育ちました。お会いできて光榮です」

私は思わず、手を差し出していた。握手……してほしかったのだろう。

「……ふふっ。大人っぽいと思ついたら、心根はちゃんと、子供なのね」

「おかしいでしょうか」

「いいえ？ とっても、愛らしいわ」

そう言つて、カグヤは私の手を握つてくれた。すべすべで、柔らかくて、冷たい感じがするけど、でも確かに暖かくて。しばらくそうしたあと、私は名残り惜しげに手を離した。

「ありがとうございました。思い出になります」

「気にしないでいいのよ」

私にそう言つて微笑むと、カグヤはレイセンのそばまで歩いた。

「ウドング、その子、まだ声が戻らないのかしら」

ノーマの頭を撫でながら、カグヤは言った。

「はい。会話を交わそうとはしているのですが、どうにも反応が薄くて」

「……会話はもう諦める、といつのもそろそろ視野に入れるべきね。今度から筆談を覚えさせて」

カグヤの指示に、レイセンは何も言わずに礼をした。

「それと、てゐは？」

「今薬の材料を取りに竹林に向かつており、ここにはおりません」

「そう……」

カグヤは残念そうに肩を落とした。その様子も美しくて、私は惚れ惚れするような気持ちを感じた。

「……わかつたわ。レイセン、てゐが帰つてきたら私の部屋に寄越して。話があるから」

そう言つてカグヤは歩いて私の方へと向かつてくる。きつと、部屋に戻るのだろう。

「そうだ、澪。永遠が欲しかつたら私達のところへ来なさいな」

「……永遠？」

「そう、終わりなき生を、共に楽しみましょっ？」

襖を開けて、部屋に戻る寸前、カグヤは私にそんなことを言つた。

「……考えておきます」

「ふふ、応対の仕方は立派な大人ね。それじゃあ、よい返事を期待してるわ」

ぱたりと襖が閉じられ、カグヤの姿は見えなくなつた。

「綺麗な人」

母よりも綺麗な人というのを、私は初めて見た。

それにもしても、永遠？ なんのことだらう。人はいつか死ぬとうのに。それとも、あの人は永遠に生きる術を持っているのだろうか。……母のようにならずに済む方法があるのだろうか。

「……澪ちゃん？ 姫様の言うこと、本気にしたらダメだよ？」

レイセンがそばに来て、そんなことを言つた。

「なぜ」

「姫様、気まぐれで物を言つから……」

「それでも、死なずに済む方法があるのなら」

私は、永遠を求めるのだろうか。ずっと、ずっと生き続けるのだろうか。

レイセン、あなたなら……どうする？

「澪！ 次行くわよ！」

そうレイセンに聞こうとしたとき、レイセンの後ろの方にあつた襖が開き、アリスが出て來た。

「アリスお姉ちゃん」

「そこにいたの。楽しめた?」

私はアリスのそばまで歩いてから、頷く。

「そう? ここ、なんにもないでしょ?」

「かぐや姫がいた。それだけで十分」

「かぐや姫? ..... ああ、輝夜のことね。まあ、子供にとっちゃん馴染み深いか?.....」

アリスはそう言いつと、私の手を握った。

「さ、行きましょ。パジャマは私の家に運んでもらえる手はずだから、安心していいわ。靴も、くれるみたい」

そう言つて、アリスは手元の鞄から小さな、私の足に合いそうなサンダルのような靴を取り出した。

「レイセン、澪が世話になつたみたいね」

アリスが歩くと、レイセンもついてきた。玄関先まで送ってくれるのだろうか。

「いえ。しつかりとした子供さんですね」

「ホントよ。とこつか澪が昔話を知つてたことが驚きよ。難しい本ばかり読んでるイメージだつたわ」

私は首を振る。

「難しい本は楽しくないから嫌い」

「正直なところも、子供らしいのね」

らしいも何も、私は子供だ。一人では何もできない未熟な存在だ。

「これから、どちらへ?」

「まあ、闇魔のところを予定してゐるナビ、今日は無理ね。澪も疲れたでしょ? し、今からあいつのところ行つてたら日がくれても帰れないわ」

玄関までたどり着くと、アリスは私の前に靴を置いてくれる。

「ありがとうアリス」

「これくらい気にしないで」

私は置かれた靴に足を入れた。少し大きいけれど、問題なく歩ける。

さっきまでとははるかに違う。アリスも同じように靴を履くと、玄関の引き戸を引いた。

外には竹の林が生えており、ここを抜けることができるのだろうか、そんな不安に駆られる。

「じゃあね、麗仙。永琳によろしく言つといで」

「はい、それでは」

アリスは私の不安に構わず、竹林に入つて行く。

## 大人の外来人と私

麗仙が小さくなつて、永遠亭が見えなくなるころには、私はすっかり方向を見失つてしまつていた。

「だ、大丈夫なの、アリス」

「大丈夫よ」

同じような景色が延々と続くここが、少し怖い。

アリスにくつついでしばらく歩いていると、男の人を連れた女人が視界に入った。

男の人はスーツを着ていて、小さな鞄を下げていた。日本だつたら違和感ないのだろうけど、こんな竹林じゃ不審人物に見えてしまう。

女人は白い長髪に、頭に大きなリボンをつけていた。白い上着に赤いオーバーオールのようなズボン。赤い瞳をしていたため、私は彼女が吸血鬼ではないかと思った。

「ん、アリスか。永遠亭の帰りか」

けど、彼女には恐怖を感じない。むしろ暖かい人柄ではないかと想像した。

「ええ、元気みたいね、妹紅。そつちは外来人？」

「まあな。その子もか？」

「そんなところ」

軽く挨拶を交わすと、一人はお互が連れてる人物が気になつたらしく、すれ違う寸前で止まつた。

「……よ。私は藤原妹紅。そつちは？」

「私はミオ・マーガトロイドです」

「一応、うちの妹。そつちの中年は？」

アリスが聞くと、モコウという女性は後ろのスーツ姿の男性に目配せした。

「私は東野康介」

そう自己紹介した彼の声は、上ずつっていた。

「だから、康介、無理して気張るなって」

「黙ってくれ。早く帰してくれ。仕事があるんだ」

「気を遣つてくれたモコウに、東野は冷たくそう言った。

「あなた随分冷たいのね」

アリスも私と同じことを思つていたようだつた。

アリスの言葉に、東野はさらに言つた。

「君には関係ないだろう。それに、言葉遣いに気をつけたらどうだ？ 私はこれでも、社員五千人を抱える会社の代表取締役だぞ？」

「この人、そんな上の役職の人なんだ。少し私は感心した。

「何？ 暗号？」

「こいつずつとこんな調子なんだよ。どうから電波受け取つてんのか、とか本氣で思つてよ。今から永琳んとこに行くつもりだつたんだ」

もしかしてモコウは、東野が病氣だとでも思つているのだろうか。その可能性は否定できないが、訂正はしておいた方がいいだろう。

「モコウさん」

「ん？」

「代表取締役というのは、日本のとある会社形態で上位に位置する役職」

「へえ、偉いさんだつたのか、あんた」

モコウが感心したように東野を見ると、彼は偉そうに胸を張つた。「ようやく理解してくれたか。にしても君、小さいのに物知りだね。偉いぞ」

そう言つて、東野は私の頭を撫でよつとした。ふと、背中に悪寒が走つた。

「ありがとうございます。お気持ちはありがたいのですが、あなたの手に恐怖を感じるので、撫でるのをやめてください」

私は一步下がつた。東野はピクリと動きを止めた。なぜだろうか、この人の手がとてもなく怖かった。

「あはははは！ なんだこのガキ！ 面白い拾いもんしたな、アリス！ いやあ、愉快愉快」

残念だつたな、と言つてモコウは東野の肩を叩いた。彼は顔を赤くしてその手を振り払つた。

「黙れ！ なんだこの子供は！ アリスと言つたか、一体どんな教育をしてるんだ！」

「いや、私に言われても」

「私は外来人です。アリスはここにいる間だけ、家族になつてくれると言つてくれました。アリスを責めないで」

私が言うと、東野はう、と言葉を詰ませた。

「……君は何を考えてそう大人をからかうような事を言つんだ？」

「からかうなど。私は私の思つたことを伝えただけです。悪意はありません」

「何をバカな！ 子供がそんな口を聞くときはな！ 大人をバカにしてる時だと決まつてているんだ！ もつと子供らしく話せないのか！？」

東野の言葉に心がささくれ立つた。この人は、私がいた世界にいた大人と同じことを言つのか。私は間違つていない。何も嘘をついていない。

だけど、私が間違つていると判断されてしまうのだろう、きっと。いつものように、そういうことにされるのだ。モコウも、アリスも、大人である東野のことを信じて……。

「ちよつと、あなた？ さつきから随分偉そうな口を利いてるけど、

ちよつとは落ち着いてモノを考えたらどう？ この子みたいに」「な、何を。君は、そんな子供の言つことを信じるのか？」

「当たり前。あなたの数倍信用に足るわ」

アリスは、言い切つてくれた。私のことを疑いもせず、信じてくれた。

「ふん。さつきから表情一つ動かさない子供が信用に足る？ 血迷つてるとしか思えん」

「……あなた、いくつ?」

「? 三十五だが」

「無駄に生きたわね」

「何をつ!?」

アリスに、東野が掴みかかるとした。私はアリスを後ろに引っ張つて、代わりに私が前に出た。東野の前に、両手を広げて立ちはだかる。

「アリスお姉ちゃんに、手を出さないでください」

東野は拳を振り上げた格好のまま、動かなかつた。しばらくして、拳を下ろした。

「……わかつた。行こう、妹紅。こんなやつらと一緒にいたくない  
「酷い言い草だな、私の知り合いに。」

「……ああ、そうだ、言い忘れてた。私はあなたを永遠亭に送り届けたら帰るんで、あとは一人でなんとかしろよ」

永遠亭の方に足を向けた東野が、驚いたようにモコウに顔を向けた。

「何驚いてんの?」

「い、いや、まさか置いていかれるとは」

「は? なんで私があんたと行動一緒にしなきやいけないんだよ」

そういうと、東野は私を指さした。

「そいつだって外来人だろう? 外来人は保護するべきではないのか!?」

モコウは呆れたように肩を落とした。

「あんな。お前……。いや、違う世界で子供も大人もないわな。  
まあ、あれだ。さつきまで持論展開してたじやん」

「あ、ああ」

「あれが気に食わないんで、一緒に行動できない。理解したか?」

そんな、と東野は呟いた。鬼のような形相になつて、私に向かつてきた。

「……」

「いい、私一人で大丈夫だよ、アリスお姉ちゃん」

武器を持った人形を取り出したアリスを、私は手で制した。殺さ

せるわけにはいかない。

私のところに向かつてきました東野は、私の胸ぐらを掴んで、吊り上げた。苦しくて、息がつまる。

「お前のせいでの、私はこの得体の知れない場所で一人になつてしまつた！ どうしてくれる！？」

「私のせいじゃない。あなた自身の責任」

「何だと！？」

頬に痛みが。はたかれたのだと「のは、いちいち確認しなくともわかつた。

また、この人も怒るのか。なぜ、私は大人を怒らせてしまうのだろう。大人達が言うように、私が悪いのだろうか。

「落ち着いて考えてください。あなたが彼女たちなら、どう思うかを」

「なぜお前にそんな偉そうに言われなければならない！」

偉そうに。いつも大人達は言つ。偉そうに聞こえてしまつのは、きつと私の丁寧語が間違つているせいだ。

「まだまだ、私は勉強し足りない。もつと学ばないと。

「お前が黙つていれば、私は！」

「私はその子がしゃべつてくれて嬉しいけどな。危うくバカと一緒に行動するところだつた」

モコウの言葉が嬉しいけど、今は少しそれどじるではない。

「黙れ！ 今私はこいつと話してるんだ！」

胸をさらに締め上げられ、さらに痛みが増す。殺されてしまつではないだろうか。そんな不安がわずかに生まれた。

「やめてください。話し合いましょう」

「うるさい！ 大人の私が、躊躇してやるのだ！」

ギリギリと音がして、息がし辛くなる。この体を、壊させるわけにはいかない。

この体は、母にもらつた大事なものなのに。

それに、傷がついてしまつたら、またアリスが心配する。

「お、落ち着いてください。私はあなたに何もしません。悪意もありません」

「無表情で言われても、説得力などない！」

どうすればいいのだろう？

東野の気持ちも理解できないわけではない。この人はきっと、一人になることが怖くて、一人になつてしまふ原因を自分に帰結したくないから、私をこうして攻撃しているのだろう。ならば、一人でないことを示してあげれば大人しくなつてくれるだろうか。

「あ、あなたは、一人ではありません」

「何を知つた風なことを！」

「きっとこの幻想郷には、あなたと気が合う外来人がいるはずです、だから」

「そのばしのぎの言い訳をするな！　ああ、本当に、お前を見てる」とイライラする！

私は説得を諦めた。私では、言葉が足りなかつた。なぜ、私はこうも上手く言葉を運用できないのだろう。

もう、この人は私の言葉を聞かないだろう。全身の力を抜いて、私はただされるがままにされる。少しだけ、楽になる。

見たところ、東野はここにくる前まではごくふつうに働いていたはずだ。今こうして私の胸ぐらをつかみ、そして首がしまつていることに気付かないのも、今まで喧嘩などしたこともなく、加減をしらないから。ならば、私が気絶すれば、殺してしまつたと思うはずだ。いくらなんでも、その時点で我に帰つてくれるはず。

「……」

どさりと、私は地面に落ちた。硬い地面にお尻が当たつて痛かつたけど、首を締められるよりははるかにマシだった。

東野の方を見ると、一体の人形が彼の腕を押さえつけていた。動かしているのは、もちろんアリスだった。

「あなた、人の妹を殺そとするんじゃないわよ

「う、うるさい」

「因果応報。死ね」

槍を装備した人形が一体、東野の前までふよふよと浮く。いくら小さいと言つても凶器は凶器。あんなので首なり心臓なりを刺せば、死んでしまうだろう。死なせるわけにはいかない。

なぜか保護しているはずのモコウは見て見ぬ振りを決め込んでいるし、私がやるしかない。

私は東野と槍人形との間に入つて、東野をかばうように両手を広げた。

「どいて」

「殺さないで」

アリスはため息をついた。

「なんですよ？ あなた、後ろの彼に殺されかけたのよ？」

「この人は私を殺せない」

「根拠は？」

私は後ろを振り向いた。東野は私がなぜかばうのか理解できないようで、呆然と私のことを見ていた。アリスの方を見て、私は自分が考えていたことを伝える。

「この人は戦闘はおろか殴り合い一つ経験したことがないはず」「だから？」

「あのまま首を締め続けたところで、私が気絶した時点で殺したと思つて手を離す」

「……ま、そうかもね」

アリスはそう言つてくれた。ほつと、私は息をついた。

「でも、そいつ、それでは納得しないみたいよ？」

アリスに言われて、後ろを振り向く。

「私をそんな風に見ていたのか。大人をなめるのも大概にしき」

「……私、あなたを守るつと」

「うるさい！ お前のよつなガキに守られんでも、私は一人でなん

とかなつた！ 勝手なマネをするな！」

この人は何を言つてゐるのだろう。何か勝算もあるのだろうか。私が恐れずに槍人形の前に出てこれてゐるのは、アリストは私を守るために力を振るつてくれてゐると信じてゐるからだ。もしアリストが敵なら、私は全てを投げ出してでも命乞いをするだろう。

この人は、勝つつもりなのだろうか。勝てるつもりなのだろうか。

「……戦うつもりなの？ アリスト？」

「なぜそんな目で見る！ 大人をなめるな！」

「もういいかげんにしろよ、康介」

今まで傍観してゐたモコウが、ようやく口を開いた。東野はモコウの方を見た。モコウは東野の目を見て、それから嫌味たっぷりに嘲笑つた。

「お前、ほんとに滑稽だな」

「な、何が」

「元の世界でのプライドか？ オーやだやだ。偉いさんになると、自ら命を捨ててでも守るべきプライドがあるんだねえ」

「何を言つている！？」

東野にまるでとりあわず、モコウは私を見た。

「どいてやれよ」

「でも、どいてしまつたらこの人は死んでしまう」

「別にいいだろ。こいつ、お前の家族か？」

私は首を振つた。この人が私の家族かと思つて、吐き気がする。

「じゃあ、ほっとけよ」

「私はもう人の死体を見たくない」

モコウは深くため息をついた。

「気持ちはずげーよくわかる。ホント、痛いくらいにな。

でも、割り切れよ。いや、そりや最初は無理だろうよ。でも、一回だけだ。一回、敵が死ぬのを見逃すだけでいいんだよ。な？ 目を閉じて、一步下がれ。そうすりや、お前の敵はいなくなる

「ここを動いて、そしてこの人が死んだら、私が殺したようなもの」

妙に優しいモコウが気になつたが、構わず私は続けた。

「……あのな。殺すのはお前じやねえ。アリスだ」

「なら、なおさら。私は家族に人を殺して欲しくない」

「お前のためだぞ？」

「それでも」

私はアリスを見た。アリスは呆れ返つた様子で私を見た。

「アリスお姉ちゃん、お願ひ。この人を見逃してあげて」

「……あなたは、それでいいのね全く、お人好しね」

頷く。槍人形と東野を拘束していた人形がアリスの元へと帰つて行く。

「だいじょうぶ……」

後ろを振り向くと、東野が私を捕まえようと、両腕を広げていた。それから私は精一杯抵抗しようと思つたけれど、身動きを取る前に捕まつていた。腕を首に巻きつけるようにして回されているため、私は動けない。こんな状態では、何もできない。

「ははは、さよならだ康介。ホント、澪に感謝だよ。クズと行動することになりかけた」

モコウの手のひらから、煌々と燃える拳大の火の玉があった。

「ち、近づくな、私に手を出すな！ こ、この娘がどうなつてもいいのか！」

「お前、自分が燃え尽きる前に祈る以外の何ができるとでも思つてんのか？」

モコウは火の玉を東野にぶつけようと、思い切りふりかぶつた。

「待つて、妹紅」

「なんだよ。お前も澪と同じ考え方か？」

「違うわ。万が一にも澪に引火したら、澪が死ぬわ

「……は？」

アリスは私の能力のことを言つてゐるのだろう。私は知らない振りをするしかない。

「とにかく、澪に全く当てない自信があるなら、やつてちょうだい

「いや、無理だし。髪ちょっと焼いても大丈夫だよな、って言おつ  
と思ってたんだが」

「女の命に何するつもりだったのよ、全く。で、どうやって始末す  
る?」

アリスとモウはまるで冗談でも飛ばしあつてゐるような雰囲気  
で会話する。私は別に構わないのだけど、東野は違つみたい。

「お、お前らふざけるな! い、いいか!? 私が逃げるまで手を  
出すなよ! ?」

「とか言つてゐるけど。……やっぱり私がやるしかないわね。死にな  
れい」「

アリス後ろから魔方陣が現れ、そこからいくつもの人形が出てく  
る。それは全て凶悪な武器で武装されていた。

「アリスお姉ちゃん」

「すぐ助けてあげる。目を閉じて」

……さすがに、連れ去られたら何をされるかわからない。ここは、  
割り切るしかないのだろうか。

自分の命と東野の命、どちらを優先させるべきだろうか……。

私には、ついに判別がつかなかつた。だから、黙つた。アリスに  
任せることを選んだ。アリスの言うとおり、私は目を閉じた。

「よし、よく選んだわ、澪」

ひゅんひゅんと周りに何かが飛ぶ音がする。これで、私は十字架  
を背負うことになるのだろうか。

そう思つていたら、ぐい、と思い切り首が締まつて、振り回され  
るような感覚がしたあと、お腹に突き刺さるような痛みが走つた。  
目を開けて、疑問に思つ。どうこいつだろ? なぜ私は、アリ  
スの人形に刺されているのだろう。

「は、ははは! 私ではない、お前が刺したのだ! い、これで  
わかつただろう! わかつたら、私に手を出すな!」

アリスの人形の動きが止まつた。そうか、私は盾に使われたのか。  
なんてふがいない。私の存在が、アリスの枷になつてゐる。なぜ、

私ごと攻撃しないのだろう。決心がつかないのだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に構わず」

「……」

アリスは何も言わず呆然と立っていた。なぜ。どうして今、何もしてくれないの。

ゆっくりと、アリスと私の距離が遠ざかる。そして、離れる速度はだんだんと早くなつてくる。

「……助けて」

アリスの姿が完全に消える直前、私はアリスの方へと手を伸ばした。

星をつかもうと夜空に手を伸ばしているような気分になった。アリスはきっと、私を探してくれる。もし切り捨てられたら、その時はその時だ。

連れ去られている最中も、私は考えることをやめない。

どうやって逃げ出すか。力では及ばない。脚力も相手の方が強い。思考力も、何もかもが私の上を行く。そんな大人から、一体どうすれば生き延びられるか。

私はそんなことをかんがえながら、ただ連れ去られるがままに身を任せた。無駄に抵抗して殺されるわけにはいかないのだ。

殺されさえしなければ、生きて帰れさえすれば、それでいい。

私は、必死に逃げ出す東野を見た。

その顔は怯えと恐れに染まっていた。それは、今こうして人質になつている私の心境と非常に良く似ていた。

## 壊れた大人と私

竹林の中には、小さな洞窟があった。東野は入り込んだ。入り口は狭く、入る時に私の服の一部が裂けてしまった。パジャマじゃなくてよかつた、と一瞬だけ思った。

東野は私を洞窟の奥の方に放つた。ゴジゴジとした岩肌にお尻をぶつけた。小さい穴のあいたお腹とお尻が痛いけど、それ以上に、怖かった。

この洞窟はとても小さく、どんなに大きく見積もっても四畳は超えないだろう。湧き水がどこからか染み出しているらしく、壁の岩は全て濡れていた。土臭い匂いがして、むせそうになる。明かりは東野がいる入り口から注がれる光だけ。

こうして入り口を塞がれでは、どうあっても逃げられない。

後ろを振り向くと、行き止まりだった。つまり、私はアリスが助けに来るまでこんな狭い場所で東野と二人きり。

「ま、全く。バカな女だ。ははは、私を、誰だと思ってる……」

そう言つと、東野は入り口に座つた。逃がすつもりはないらしい。私はひたすら黙つている。今、私の命を握つているのはこの人。機嫌を損ねて殺される羽目にだけはなりたくないなかつた。

「にしても、あの二人、美人だつたな。ふふふ……」

彼の頭の中では、一体どんな想像が繰り広げられているのだろう。絶対に知りたくない。

「……お前も、中々。まだまだ子供だが、将来性はある」

「なんの、話をしているの」

品定めするかのような東野の物言いに、私はつい、口を開いてしまつた。

「教えてやろうか?」

失敗した。

東野は腰を上げ、私に近づいて来る。目がおかしかつた。据わつ

ていて、頬も妙に赤い。スーツのネクタイを緩めると、ゆつくりと私の肩に触れた。

「……わ、私は、まだ子供」

「知ってるよ。大人にしてやるよ  
ダメだ。早くなんとか切り抜けないと、取り返しのつかない事になる。

「近づかないで」

にじり寄つてくる東野は、止まらなかつた。

この人はきっと、命の危険が迫つて、理性よりも本能の部分が思考の半分以上を占めているのだろう。だから、私のような子供にすら、欲情するのだ。状況判断力も鈍つっている。ならば……どうする。何かを言う？　何を言つても無駄だろう。むしろ、余計に煽るだけかもしねれない。

何かをする？　大人相手に何をしろと。

服を脱がそうと迫つてくる手を見つめながら、私は思考する。  
このままあえて、汚される。それならば、あるいは、少なくとも、その間は殺される心配はない。ない、が……。

「この期に及んで、まだ眉一つ動かさないのか？　何もしないとでも思つてているのか？　大人だから、子供を守るものだと、本気で思つてゐるのか？」

違う。大人は子供を守らうとはするが私を守らうとはしない。

「……やめて」

私の服がはだけさせられる。上半身の全てをこの人に晒してしまつたのが、気持ち悪い。このまま私は、一生ものの記憶を、植え付けられてしまうのだろうか。そんなのは嫌だ。この男が私の最初で、そして一生残るなど、気持ちが悪くて仕方がないだろう。

「ふん、本当にそう思つてているのか？　嘘の塊だな、お前は」

なんとかしなければ、早くしなければ私は、知りたくもない痛みを刻まれる。

そうだ。私に手を出さなければまだ命だけは助けてくれるかも、

とこうことを伝えれば、躊躇してくれるかも。

「し、死にたくないでしょ」

「ん？ ああ、そのことか。もういいんだ」

私は思考を止めてしまった。

「私は、あの二人に殺されるだろう。ここだってどれだけばれずに済むかわからない。だから……」

私は耳を塞ごうとする。私の両手が東野に押さえつけられ、岩肌に縛り付けられるような格好になる。まるで押し倒されたかのような感覚だった。向こうももちろん、押し倒しての感覺なのだろう。

「だから、最期にお前の悲鳴を、お前が表情を歪めるところを見てみたい」

ダメだ、諦めよう。

ここまで強い決意を揺るがすほど強い言葉を私は知らない。私は言葉を発するのをやめ、全身から力を抜いた。今の私はただの人形のようなものだ。

抵抗をやめた私を、東野は好き勝手にいじる。下の服に手が伸びようとしたとき、東野が凄い勢いで振り向いた。

「な、なんでこんなに早く」

「ここは、私の庭だ。ほら、澪を出せ。今なら命だけなら助けて……」

東野が慌てて私を左手だけで思い切り抱きかかえ、首を掴んだ。モコウとアリスがショックを受けたように目を見開いているのが見えた。首が痛くて苦しいけど、もういい。

「……何をした？」

「は、はははは！」

東野はただ笑った。ついに精神に異常をきたしたのだろうか。

「この娘に大人の恐ろしさを心の底まで刷り込んでやつた！ これ以上この娘に何かしてほしくなければ、私が逃げるのを」「……」

モコウはやれやれと首を振った。それとほぼ同時、肉が焦げる嫌

な匂いがした。その後、私は解放された。

「ぎやああ！？」

「わかつてねーな。ほんと、わかつてねえよ」

東野の方を見ると、彼の右手が炎に包まれていた。それはやがて、腕全体に燃え広がっていく。

「もうお前、死ぬしかねえよ」

苦しそうに叫ぶ東野の叫びが、耳に障る。

「澪！」

アリスに抱きしめられて、東野から引き離してくれた。東野につけた炎は全身に広がり、彼の全てを焼き尽くやうとした。

「ま、待つてモコウ」

私は彼女を止めようと口を開いた。

「ダメだ。こいつは燃やす」

「殺さないで」

「アリス。先永遠亭に行つてろ。あんまりこいつのガキに見せんな」

私の言葉は、届かなかつた。

でも、届いてくれなくてよかつた、と思つ私もいた。

「わかつた」

アリスは私を抱きしめたまま、空を飛んだ。浮遊感が少し嫌だつたけど、アリスに抱き締めてもらえて、凄く安心する。

「大丈夫よ、澪。永琳はすぐ優秀な医者だから、何も心配はいらないわ。大丈夫」

「……ありがと、アリス」

疲れた。久しぶりに悪い大人に攫われたから、妙に体力を消費した。何も感じなければ、こんな風に思うこともないのだけれど。なんとかして感じずにいる方法はないだろうか。

「ちょっと眠るね。疲れちゃつた」

「ええ。ゆっくり眠りなさい」

アリスに了解をもらつと、私は目を閉じた。

意識がおちる寸前まで、迫る大きな手と、東野が燃える姿が瞼の裏に浮かんで離れなかつた。

目が覚めると、アリスの顔があつた。心配そうな表情になつていた顔は、私が目を開けたことで嬉しそうな表情に変わつた。

「おはよ、澪。気分はどう?」

「おはよう、アリスお姉ちゃん。身体的には問題ないとと思つ」お腹をさすつてみたが、痛みは感じなかつた。真新しくなつている入院服を捲り上げてお腹を見ると、傷一つなかつた。

「ハイリンは?」

「ここは私の家よ。傷が完治したんで、帰つてきたの」そういえば、ここは永遠亭とはかなり作りが違う。全体的に木製だし、壁の上の棚やベッドの小物入れのところには大小様々な人形が大量に置かれていた。

「そう」

私は体を起こした。アリスが優しく手で体を支えてくれようとするけど、私は首を振つた。ありがたいけど、自分でできることはする。

「……ごめんね、澪」

「何が?」

私は首を傾げた。何か私は、アリスに謝られるようなことをされただろうか。

「その、お腹、刺しちゃつて」

「そのこと。気にしないで。悪いのは、アリスお姉ちゃんじゃないよ」

東野は……死んだのだろう。私は一つの命を見殺しにした。そして、彼が死んでよかつたと思う自分が、許せない。

「……ありがとう、澪。その、それからね、あなたが東野にされたことなんだけど……」

あわあわと言つにくそつに、アリスは切り出した。そういえば、

私は東野に汚されたことになっていたのだったか。なぜ彼はあんなことを言つたのだろうか。

「死にたかったのだろうか。よくわからない。

「その、あれは……」

「知つてるよ、大丈夫」

「大丈夫つて……」

「何もされなかつたから」

私は真実をアリスに告げた。アリスはぽかんとして、聞き返してきた。

「な、何も？ でも、あいつは……」

「最後の彼は様子がおかしかつた。……でも、間一髪だつたのは事実。本当にありがとう、アリス。あなたのおかげで、痛みを知らずに済んだ」

もし、そのままアリスの助けが来なかつたら、私はどうなつていたのだろうか。体は壊れ、心も狂い、私は私でなくなつてしまつたのだろうか。そんな恐れが体を包む。

「そ、そんな。気にしないで。そうか、よかつた。まだだつたんだ。間に合つたんだ、私は……」

そう呟くように言つと、アリスは私の方に近寄つて、両手を広げて抱きしめようとする。

「……」

一瞬だけ後ろにさがるつとして、なんとか自分を押さえる。

アリスは敵じゃない。

そう自分に言い聞かせる。やはり、私の中で東野に襲われたことは大きい事のようだ。警戒心が変に強まつている。

「本当に、よかつた、無事で……」

ゆつくつと、私は抱き締められた。東野にされたみたいに乱暴ではなく、まるで「ワレモノにでも触るかのようだつた。

おずおすと、私も抱き締め返す。

「……ありがとう、アリスお姉ちゃん」

しばりぐ、私たちはそうして抱き合っていた。温かくて、やらわらかくて。ずっとこうしていたいような感覚がしてくる。「澪、私はもう失敗しないから。今度はちゃんと守るから、安心して」

アリスは私から離れて、私の田をじっかりと見てそう言った。

「うん」

私は素直に頷いた。

「ふふ、素直ね。……ふああ」

安心したのか、アリスは手で口をおおい、大きなあぐびをした。

「眠いの、アリスお姉ちゃん？」

「ん、まあね。普段なら寝てる時間だから

私は周りを見回して、時計を探す。いくら探しても、時計らしきものはこの部屋に一切なかつた。

「ああ、正確な時間は知らないわ。田が落ちてからどれくらい経つたか感覚で判断してるだけだからね」「時計なくて、不便じゃない？」

アリスは小さく笑つた。

「ぜーんぜん。そもそも私時計がいるほど正確な時間必要としてないし」

そんな人がいるのか。私は驚いた。

でも、確かに学校や仕事など、正確な時間が必要である場所に所属していなければ、正確な時間はなくとも生活に困らない……のだろうか。

「じゃ、私寝るから、もうちょいスペース空けて」

「え、うん」

私はそう言われて、アリスがいる方とは反対側に少し移動する。アリスは部屋の明かりを指を鳴らすだけで消すと、私の隣で横になつた。ベッドは確かに広めだけど、まさか一緒に寝るなんて思いもしなかつた。

「アリス、私床で寝る」

「気にしないの、ほら布団」

「あ、ありがとう」

アリスに掛け布団を被せてもらひ。

アリスに迷惑ではないだろうか。やはり、どいた方がいいのだろうか。

違う。私は自身で自分の考えを否定した。

私は怖いのだ。誰かと同衾することが、何をされるのか、何があるのか、どうなるのか、わからなくて、怖いのだ。

アリスは女性だ。そんなことはわかっている。それでも、私は記憶の中の誰かとアリスを重ねてしまう。そんなのは、絶対に嫌だった。

「あ、アリスお姉ちゃん、怖い」

「どうしたの？」

「「めん、アリスお姉ちゃん。」「めんなさい。私、誰かと一緒に眠るのが怖い」

抱きしめようとしてくれたアリスの手が止まった。

「……詳しく、話を聞かせてもらつてもいい？」

頷いて、私は口を開く。誤解されてはいけない。アリスが嫌いだから一緒に眠れない、だなんて思われてはいけない。

「私、あまりよく憶えてないのだけれど、何かがあつたみたいで、何故か、誰かと一緒に眠ると怖くて怖くて仕方がなくなるの。アリスお姉ちゃんのことが嫌いなんじゃないの。大好きだから、嫌いたくないの。それだけはわかつて。お願ひ」

私は精一杯、言葉を尽くした。嘘は何一つ言つていない。信じてくれるだろうか。

「そうなの。……それは、「ごめんね。わかつたわ、あなたがここで眠りなさい」

「でも、ここはアリスお姉ちゃんの家だし」

「いいのよ。何かあつたら、呼びなさい」

私が止めるのも構わぬ、アリスは立ち上がりて部屋を出でていって

しました。

……嫌われたかな。一人で布団をひっかぶり、目を閉じる。

アリス、ごめん。大好き。

私は眠りに就いた。それから、夢を見た。

元いた世界の夢だった。

今と同じように、私が眠っている。その隣に、美しい女性……母が一緒に眠っていた。

「ねえ、澪」

「なあに、ママ」

そうだ、この時の私はまだ無知で、滅多に帰つてこないお父さんと優しくて美人の母の言つことを聞いていれば全てうまくいくと、心の底から信じていた。母も、お父さんも、滅多なことでは話しかけてすらくれなかつたけど、そう思つていた。

「あなたは、私と一緒にいたい？」

「うん！　ずっと、ずっとと一緒にいたい！」

「そう……」

ああ、思い出した。この夢は、あの時の記憶だ。忘れていた、私の過去の夢だ。なぜ今更思い出してしまつのだひつ。

「じゃあ、一緒に行きましょう？」

「どこへ？　おでかけ？」

母が頷くのが見えた。電気が消されて、母が何をしようとしているのかがよく見えない。

「とつても、いいところよ

「…」

この時の私は、息が詰まるのを感じていた。今なら、紐で首を締められてこいるということがわかつただろう。

「な、なに、を……かはつ。何をするの、ママ？　やめてよ……」

「大丈夫よ、澪。すぐ楽になるから」

あの時は、何を言われているのか理解できなかつた。どんどん紐

に込める力が強くなる。意識がぶつりと切れかけたあたりで、ようやく私は殺されようとしていることを理解したのだったか。

「……い、いや……助けて、やめて、ママ……」

「大丈夫、大丈夫よ。何も心配はいらなしわ。すぐママもいくからね。ずっと、ずっとと一緒にね」

確かに、必死で助かるひともがいた記憶がある。首に手を当てて、紐を外そうとするのだけど、できなかつたことを思い出した。

ああ、そうだった。この時の母は、私を殺そつとする時に細いワイヤーを使ったのだった。我が母ながら、残酷なことを。

「……い、嫌、死にたくないよお……！」

「！」

この時初めて、私の必死の懇願が届いた。ワイヤーから力が抜け、私はようやく新鮮な空気を吸うことができた。

「「ほつ、がほつ！ ま、ママ……。うわああん！」

私が号泣している隣で、母は自分がしようとしていたことに気が付いたらしく、自分の手を見つめてわなわなわと震えていた。

「……澪」

泣いてる私に構わず、母はどこかへ行つてしまつた。しばらくすると私は泣き疲れて眠つてしまつた。どこかへ行つた母を追おうとはしなかつた。

そして、次の日の朝、目が覚めて、全てを忘れていた私は、いつものようにリビングへ行き……。

吊り下がつて揺れる母を見つめた。

「！」

私は飛び起きた。そうか。

私がアリスと眠ることを恐怖したのは、母と重ねてしまつたからか。

にしても、今日の夢で様々なことを思い出せた。疑問も、同時に湧いてきた。

なぜ母は私と心中しようとしたのだろう。

…… 考えても詮無いことだ。 考えても、気が滅入るだけ。 もう一

度眠ろう。 そうすれば、幸せな夢が見れるだろう。

それから朝まで、私の意識が途切れるることはなかった。

眠い。仕方あるまい、と自分を諫める。

「入るわよ、澪」

「どうぞ」

アリスは入ってくるなり驚いた。

「……目充血してるわよ？」

「眠れなかつた。おはよっ、アリスお姉ちゃん」

私はベッドから降りて、昨日ハイリンにもらった靴を履いてそういつた。誰かに朝起きておはよっと言えたのは、随分久しぶりだった。

「あ、おはよっ。眠れなかつたって、どうして？」

「夢を見た」

「どんな夢？」

私はアリスのそばまで行くと、アリスを見上げた。昨日と似たような模様の服の上から、Hプロンをつけている。料理していたのだ

らう。

「隣で眠っていた母に殺されかける夢」

「……そう。それは怖い夢ね」

「夢だとよかつたのだけれど」

「え？」

なんでもない、と私は首を振った。

「ふうん……。今」飯できたんだけど、眠いんなら寝とく?」

「いい。朝寝坊の癖がついたら困る」

たとえサボり気味とはいえ、学校に通っているのだ、早起きの習慣はなくしたくない。

「そ、そつ。ほんと、しつかりしてるわね。」いちばん用意してあるから

「ありがとう、アリスお姉ちゃん」

隣の部屋に移動したアリスについて歩く。

本当に『ご飯までくれるのだろうか。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。私に何かできることはないだろうか。小間使いの代わりくらいなら、できるだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に何かできることはない？」

「ん？ そうね、じゃお皿洗い頼んでもいいかしら」「もちろん」

私は頷いた。家事くらいなら、私でもできる。掃除、洗濯、買い

物に料理に。ここに来るまでは全部一人でやっていたのだ。

「じゃ、『ご飯食べてお皿洗いしてもらつたら、今日も行きましょうか』

「うん」

アリスは、すでに料理が乗つてているテーブルについた。私もアリスの向かい側に座る。木製の皿に、スープのような白い液体が入っている。これが朝食だろうか。アリスが食べ始めるのを見てから、私も食べ始める。

「いただきます」

「……ねえ」

私がスプーンを持つてスープを飲もうとしたところで、アリスが声をかけてきた。何かしてはいけないことでもしたのだろうか。

「ちょっと気になつたんだけど、その『いただきます』って何？」

言われて、初めて気づく。そういえば、アリスは食事の前に何も挨拶をしていなかつた。この世界では食前に挨拶をする習慣がないのだろうか。もしくは、アリスにその習慣がないか。

「挨拶。意味は知らないけど」

「ふうん」

アリスはそう言つと、小さくいただきましたと言つた。

「これでいいのかしら」

頷く。

私は食事を始める。何の料理か聞きたいのだけれど、食材を知つ

たせいで食欲が失せるということが往々にしてあるので、知らないまま口に運ぶ。毒ではないはずなので、知らなくても大丈夫、……なはず。

口に含んでしばらく味わう。人肌程度の温度なので、舌が火傷するなんてことはなかつた。甘い香りととろとろとした食感で、味も良好。とてもおいしい。シチューではないだろうか、と予想する。

「すごくおいしい」

「お口にあつてなによりだわ」

何の料理だろうか。キノコが多めに入っているから、キノコシチュー……なのだろうか。

「何の料理？ 帰つてから作つてみたい」

「あなた料理できるの？」

「一通りは

「すごいわね」

アリスは感心してくれた。必要に迫られて覚えた事だつたが、こうして褒めてくれるのなら、覚えてよかつたと思える。

「これはキノコシチューよ。いっぱい作つたから、少なくとも今日はずつとこれだからね」

「わかった」

これが三食か。目の前に出されている分だけだと、昨日一切の物を口にしていない身としては物足りない氣もするが、食べられるだけで幸せなことなのだ。我慢しよつ。

「おかわり、してもいいのよ？」

「……いい」

「迷うくらいだつたらすればいいのに。変に遠慮しそぎよ」

私は首を振つた。

「これ以上食べたら、お腹を攻撃された時に吐いてしまうかもしねない」

「攻撃されること前提で物を考えないでよ。……」「、そんなに危険じゃないから」

そつは言われても、昨日は一人もの人間に襲われた。チルノとう氷精を名乗る子供と、東野の二人だ。元の世界でも、一日に一回も襲われることはなかつた。

「……ごめん、アリスお姉ちゃん。それでも、私は警戒してしまつ」

私がそう言つと、アリスは残念そうに肩を落とした。

「まあ、信じろつていう方が無茶よね。でも、お腹空くわよ？」

「満腹で動けなくなるよりかはマシ」

「ホント、普通の子供とは真逆に考えるのね」

そう言つてアリスは笑つた。嘲笑でないことは、アリスの顔を見ればわかつた。

「……話を変えるけど、今日はどこへ行くの？」

少し気になつて、聞いてみた。

「ん、昨日も通つた魔法の森を抜けて、再思の道を越えて、三途の川を渡つて、それから裁判所の閻魔に会いに行くわよ」

私は空いた口が塞がらなかつた。その行程にはかなりの無理があるようになか思えなかつたからだ。

「え、し、死ぬの？」

「は？……あつ、そういうえば、そだつたわね。ごめんごめん、勘違いさせたわね」

少し逃げるかどうかを考え始めていた私に、アリスは手を振つて否定した。

「え？」

「幻想郷じゃあね、閻魔大王は別に死ななくても会えるのよ」

「……」

会いたくない。閻魔様に会つたら、私はきっと舌を抜かれてしまう。ただでさえ他人よりコミュニケーション手段が少ないのに、言葉まで奪われたら、私は……。

「何心配してるので？」

「え？ 舌を抜かれないと……」

私がそう言つと、アリスは大笑いした。

「あはははは！ 大丈夫よ、澪。その闇魔ルールには厳しいけど、生きてる人に何かする、なんてことないから！ にしても、あなたもそんな面があつたのね～」

なんだかバカにされてるみたいで、むつとする。

「変？」

「いや、とっても可愛いわ」

「……」

なんだか、もうどうでもよくなつた。可愛い、か。初めて言つてもらえたな。嬉しい。

「」馳走様でした

キノコシチューを食べ終わると、私は両手を合わせて礼をした。

「それも挨拶？」

頷く。私よりも先に食べ終わったアリスは、遅めではあるが手をあわせ、さじこちなく「馳走様をした。

「……毎日こじんなのやつてるの？」

「うん。毎日、毎食」

アリスは煩わしそうな顔をした。

「へえ。面倒なのね、外の世界つて。前に来た外来人もやつてけど、あいつが特殊なんじやなくて、外で習慣付いてんのね」

アリスの言葉に、少し気になるところはあつた。私の前にアリスのところに来た、外来人。……昨日、レイムはアリスが連れて來た外来人が何かを企てているということを言つていた。もしかして……。

想像だけで物を考えていた私は、かぶりを振つて思考をやめた。

決めつけて考へてはダメ。

「どうしたの？」

「え、えつと、シャワー浴びていい？ 浴びたくなっちゃつて」

多少無理のある言い訳とは思つたが、アリスは不審に思つことはなかつた。

「そう？ そこの扉を出て右がバスルームよ」

「わかった。浴びて来る」

私は椅子から降りると、言われた通りにバスルームに向かう。

脱衣所も湯船も木製で、そうでないのはシャワーへッドくらいだつた。

脱衣所でパジャマと下着を脱いで裸になると、私はバスルームに入つた。バスルームと脱衣所を仕切る扉を止めるとき、私は驚いた。ここは森のど真ん中、電気も水も来ているはずがないのに、最新式の電子パネルが備え付けられてあつた。

どういう原理なんだろうと思いながら、ありがたいので使わせてもらう。熱いシャワーを浴びて、体を洗う。昨日東野に触られたところは、念入りに洗つた。

「澪。サイズが合うかどうかわからないけど、私が子供の時の服貸してあげる。ここにタオルと一緒に置いておくから」

最後に髪を洗い終わつたところで、見計らつたようにアリスがそう言つて來た。

「え？ あ、ありがとうアリスお姉ちゃん」

またパジャマを着るつもりだった私にしたら、それは嬉しい驚きだつた。

……でも、いいんだろうか、こんなに色々としてもらつて。バスルームを出ると、アリスの言つていたとおりに、タオルの下に着古したような服が置いてあつた。下着も一緒だったのは、素直に嬉しかつた。お古だとかそういうことは、気にならなかつた。

最初私は幻想郷にいる間パジャマと同じく下着をずっと着るしかないとつっていたのだ。まさか、こうして服を着替えることができることなんて。

アリスに渡された服を着て、洗面所にあつた鏡を見た。黒い長い髪と、黒い瞳、全く動かない表情をして立つてゐる私は、アリスが今着てゐる服をそのまま小さくしたような服を着ていた。

なんだか本当にアリスの妹になつたようで、とても嬉しかつた。

「アリスお姉ちゃん、お待たせ。アリスお姉ちゃんは浴びなくてい

いの？」

大きめのバスケットのような鞄を下げ、出かける準備を終えたアリスに私は聞いた。

「まあね。夜浴びるわ。何か持ち物……なんて、なかつたわね。じや、準備はいい？」

うん。私は頷いた。

「じゃ、行きましょうか」

自然な動作で手を握ってくれて、さらに私はアリスと家族なつかのような錯覚した。

家を出て、森を歩く。靴があるのとないのとでは、大きな違いなのだということを肌で実感した。

幻想郷に来て二日目の生活が始まった。

## 裁判所までの道のりと私

昨日と同じように森を行く。硬い土を踏みしめ、木々を越えて、アリスは迷わず進んで行く。

「ねえ、アリスお姉ちゃんはどうして方角がわかるの？」

「え、方角？……ううん、方角はわからないわ」

私は首をかしげた。方角もわからずにして、どうして進めているのだろうか。

「ここいら辺は私、よく來てるから。もう道を憶えたわ。それだけよ」

「へえ~」

それだけでも、できるだけすごい。

「ふふ、あなたも見知った道なら地図いらぬでしょ？」

「そうだね。それと同じかな」

アリスは頷いた。

「じゃあさ、その再思の道つてどれくらいでつぐの？」

私の質問に、アリスはしばらく黙つた。

「そうね、だいたい……。日が登り切る前には着くわ。そんなに遠くないわ」

正確な時間は教えてもらえなかつたが、わからないのはアリスも同じだろう。

「そなんだ。ありがとうアリスお姉ちゃん」

私たちはそれからしばらく黙つて森を歩く。

昨日、聞きそびれたことがあつたのをひとつ、思い出した。しかし、聞いてもいいのかどうか、悩む。

私の手を握りながら歩くアリスを見上げる。綺麗で、優しくて強い私のお姉ちゃん。嫌われたくないし、嫌いたくないのだけれど。

「ねえ、アリスお姉ちゃん。一つだけ、聞いていい？」

「いいわよ」

「東野、どうなつたの？」

アリスは黙つた。目を閉じて、何かを考えている。

「……澪。あなたは優しい子よ」

「え、あ、うん、ありがと」

優しくなんかない。私は、東野に死んでいてほしい、って思つような悪い子なのだ。優しいなんて、間違つた評価だ。

「だから、言うけど。

……東野は、死んでないわ

私が驚いたのは、嬉しかつたからか、怖かつたからか。わからなかつた。

「え？」

「そりや、酷いことされかけた澪からしたらあいつが生きてるのは居心地悪いかもしれないけど、大丈夫よ。あいつ、一度と悪さできないから」

そうは言われても、不安ではある。また、襲つて来たら。今度、私は助かることができるのか。最後の最後、彼は私に興味を持つていた。もしかしたら、というのもあるかもしれない。

「……どうしても、つていうなら、妹紅のところに私が出向いて、その」

「いい。……私は大丈夫。東野が生きていっても、気にしない」

私は言いにくそうに言葉を濁すアリスに無理をして言つた。本当なら、殺してと言つてしまひたかつた。でも、それをすればそれこそ本当に私は十字架を背負つてしまうことになる。そうなれば間違いなく、東野は私の中ですつと残り続けるだろう。そんなのは、ごめんだつた。

「そう。ありがとうね、澪」

「教えてくれてありがとう、アリスお姉ちゃん」

私は精一杯の感謝を込めてそう言つた。表情が動いたのなら、どんな顔になつているだろうか。

「ねえ、再思の道つてどんなところなの？」

「三途の川と地獄を結ぶ長い道よ

「ふうん」

三途の川、か。渡つていたら死んでしまつたりして。

……いや、あるいは、もう私は死んでいるのかも。アリスはちょっと変わつた死神で、私に同情してしまい、こうして家族ごっこを続いている。本当なら、巨大な鎌で私の魂を刈り取らなければならないというのに……。

そんなストーリーが頭に浮かんだ。

「ねえ、アリスお姉ちゃん」

「ん？」

「私、実は死んでて、ここはあの世、つてことはない？」

アリスは否定も肯定もしなかつた。なぜだろう。

「……なんとも言えないわね」

「どうして？」

「前に、自分が死んでた事に気付かずここに来た人がいたことがあつたから……」

私も、そんな人間の可能性がある、ということか。

死んだと氣付かず、存在しない体を守るため、必死になる人間は、さぞかし滑稽だろう。笑い話にすらなるかもしれない。

「アリスお姉ちゃんは、どう思つ？」

「あなたなは生きてるわ。保証する」

アリスの言葉がきつかけで、私は思い出した。……よく考えたら、私は足を切つたり腹を貫かれたりしたではないか。痛みも感じた。それは何よりの、生きている証拠であろう。……痛みを感じたことを喜ぶなど、変な私。

「そう？ なら、信じる」

私の中ではもう結論が出ていたけれど、そう言つた。このことだけじゃなくて、私がアリスに何かを騙されている可能性は、否定しきれないけど。

……まあ、別にアリスになら、騙されてもかまわない。割と本気でそう思う。

「ふふ、とっても嬉しいわ」

アリスは笑つてくれた。私に本当の姉がいたら、こんな感じなの  
だろうか。

「ねえ、アリスお姉ちゃんには、妹いる?」「ん? あなたがいるわ」

## 「本当の妹」

アリスは寂しそうに首を振つた。

「何？」なんでも答えるよ  
「いないわ。……そういえば、ちよいと気がなったことがあるて」

「ちらからばかり聞くのよ」

八、九、十、十一

「普通に」

「でも、二両親一人ともいないんでしょ？」

「つうん。母がいなだけで、お父さんはまだ生きてる」  
「え方をした。しかし、今は違う。今は、ちゃんと答える。

「昨日は、お父さんは病院に連れて行ってはくれないとこう意味、後付けだけど、嘘をついていました、よりは遙かにマシだと判断した。

「……ふふふ。隠さなくとも大丈夫よ。昨日はまだ、警戒してたん  
でしょ？」

「わかつてゐるわ」

必死で言い訳をし始めた私に、アリスは微笑んでくれた。

「警戒心があるのは悪いことじゃないわ。会ってばかりの人に家庭の事情を話せ、つていう方が無理よ。だから、気にしなくていい

わ

そう言つてもううて、私は安心した。

「『』めん、アリスお姉ちゃん。でも、今度はちゃんと話すかい」

「辛いのを無理に話さなくていいのよ？」

大丈夫。私はそう言つて、何から話すかを頭の中で整理してから、口を開いた。

「私のお父さんは、物凄く偉くて、物凄く働いて、物凄く稼いで、私にたくさんのお金を贈ってくれるの。

お父さんは、いないのと同じもの。でも、世界で一番愛してる。きっと私は、お父さんがいるから、元いた世界に帰りたいんだと思う」

「お金って……。もっと他にあるでしょ？」

「ない。でもいい。

お金が、私とお父さんとの愛の証。見えない、あやふやなものでなく、愛を形にしてる。毎月、お父さんはたくさんのお金を贈ってくれる。一度計算してみたけど、毎日三のようになに食べべて、遊び倒してもまだ余るくらいにお金をくれる」

「いや、お金のことはもういいから、他の」

「それが、お父さんが私を想ってくれてこなとこう証拠。だから私は、お父さんの愛を無くしたくないから、ギリギリで生活していた。毎日、五百円に食費を抑える。光熱費、水道代、削れる所は全部削つて、お父さんの『愛』を残せるだけ残す。いつか、数えきれないくらいの『愛情』を集めて、会いに来てくれたお父さんにどれだけ私がお父さんを愛したか、わかつてもう。きっとそうすれば、お父さんだって私と一緒に暮らしてくれる」

「いや、あのね、澪」

「お父さんは私のことを愛してくれてる……はずだと思つ。一緒に暮らしてくれないのは、きっと母を思い出しちまつから。だから、きっとといつか、私を認めてくれれば、然后、一緒に暮らししてくれるはず」

「澪」

話し終わった私に、アリスが話しかけてくれた。

「……あなたの想いはよくわかったわ」「わかつてくれた？」

私はうれしくなる。やつと、私達の愛を理解してくれる人が現れた。やつぱり、アリスは優しいな。

「ええ。ごめんなさい。私、気付いてあげれなかつた。あなたは、まだまだ、子供だつたのにね」

「私は、一度も大人になつたことないよ」

「ごめんなさいね、澪。元の世界に帰れば、あなたは、暖かいご飯が用意してあつて、ご両親が迎えてくれると勝手に思つてた。だから、今こそ言うわね」

アリスが、私の手をしつかりと、握りしめてくれる。

「私どすつと……いえダメ、まだ、速いか……。帰りたくなくなつたら、言いなさい」

「え？」

「だから、もし元の世界に帰りたくないなら、私に言いなさい」アリスは奇妙なことを言つた。

「なんで？ 私、絶対に帰るよ？」

そう私が断言すると、アリスは残念そうに首を振つて、小さく、本当に小さく何かを呟いた。

「こんな家庭で育つて歪まないはずがないじゃない。……なんで気付かなかつたのよ、私のバカ」

私には聞こえなかつたけど、アリスの顔は悔しそうだつた。

「どうしたの、アリスお姉ちゃん」

「なんでもないわ。……さ、もうすぐ森を抜けるわよ」

森の木々が晴れ、私の視界は一気に広くなつた。地平線の向こうまで続く長い道の周りを、赤々しい彼岸花が咲き誇つてゐる。そんな道を、私とアリスは行く。

「ここが、再思の道？」

アリスは頷いた。ここまで綺麗な道を歩くのはどこか気が引ける。

「ええ。ここは本来、死にたがりを思い直させるための道なのよ」

「……」

死にたがり……。自殺志願者か。気持ちはわからぬくもないが、ある命を自ら捨てるといつのはやはり、理解に苦しむ。

「あなたは？」

「？」

「あなたは、死にたい？」

アリスは奇妙なことを聞いてきた。

私は首を振つて答えた。私が、死を望んでいる？ あり得ない。

「そ、そ、う。変なこと聞いてごめんなさい」

アリスは慌ててそんなことを言つた。

「アリスお姉ちゃんは？」

「え」

「アリスお姉ちゃんは、死にたいって思つたこと、ある？」

アリスは否定も肯定もしなかつた。なぜだろう。

「……興味ある？」

「何に？」

「人が死に關してどう思つてるか」

興味。ないわけでは、ないだろう。けれど、こんな質問をする、ということは、アリスとしては聞かれたくない部類の質問なのではないだろうか。

「あるよ。でも、アリスお姉ちゃんが嫌なら、言わなくていいよ」

アリスはクスリと笑つた。

「ふふ、ありがと。澪は、本当にいい子ね」

「そんなことないよ」

私達はそれきり、しばらく黙つて歩いた。

彼岸花が綺麗。道の脇を固めるようにして咲く花々は不思議で、本当に死者の国に来たみたい。

「ねえ、澪」

「なあに」

「あなたは、お父さんのこと、好き？」

私は首を振った。

「愛してる」

何よりも、誰よりも。

「……そう」

アリスはそういうと、何も言わずに歩く。私も疑問を口に出さず、アリスと手を繋ぎながら歩く。

しばらく変わりばえのしない道を歩いていると、前の方から女人が歩いてきた。

「ん？……アリスじゃないか！ どうしたんだ、こんなところに！」

「その女人人は、ほとんど一瞬、いや、一歩でこちらのすぐ前まで来た。

「あなたのところの閻魔に用があつて來たのよ」

「へえ、映姫様に？」

アリスは頷いた。構わず歩いているのだが、その女人人は私達について歩いている。

女人人は着物のような古式ゆかしい服装で、腰には大量の古銭を吊り下げ、手には大鎌。髪の色は赤みがかったて、眼光は鋭い。チャキチャキの姉貴風、といえばわかりやすい……のだろうか。

「小町、あなたこそ何の用？ 仕事はいいの？」

「いいんだよ。最近外界から裁判所に来ることが多くなつてな、あたしは商売あがつたりさ！ ま、困るかそうでないかといえば、困らないんだけどね！ あははははは！」

「コマチ、という人は豪快に笑つた。ひとしきり笑つたあと、ようやく私の方に視線を向けた。

「うん？ アリス、こいつ誰？」

「澪よ。ほら、澪、自己紹介」

アリスに促され、私は口を開いた。

「私はミオ・マーガトロイド。外来人で、幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹にしてもらいました。よろしくお願ひします」

私は簡単にそう言つと、軽くおじぎをした。

「へえ、よくできた子供じゃないか。あたしは小野塚小町。三途の川の舟守さ

「三途の川……。舟で渡るのか。知らなかつた。

「にしても、お前、死にたいのか？」

「どうして？」

「いや、普通の子供は地獄になんて行きたがらないからさ。もしかしたら、つて思つてな」

確かに、私だってアリスがここに用事がなければ来たいと思わなかつただろう。

「私は、死にたくないから

「そりや重複。一つしかない命、粗末にすんなよ」

「ありがとう、コマチさん」

「小町でいいよ」

そう言いながら、コマチは快活に笑つた。

「やうやつて諭してると、死神っぽいのだけれどね

「つむさー、あたしはいつでも模範的な死神さー！」

「どの口が言つうのよ……」

アリスは笑つてゐるけど、怖くはないのだろうか。この人は、死神を名乗つてゐるのに。

私の怯えを、コマチはいともたやすく読み取つた。

「うん？ 靔、あんたあたしが怖いのかい？」

「……ごめんなさい」

私が謝ると、意外にも彼女は嬉しそうに笑つた。

「気にすんな！ こんなでも怖がつてもらえるんだな！ いやあ、

アリス、本当にこの子はいい子だな！」

「あのね。もうちょっと弁明しようとは思わないの？」

アリスが言うと、コマチは何かに気付いたような顔をした。

「ま、怖がらせるのは悪いよな。青、あたしは死神だけど狩る方じやない。運び屋さ

「…… そうなの？」

私が聞くと、コマチはニカリと笑った。

「おおよー。 その証拠を見せてやるー。 …… アリス、目的地は映姫様んとこでいいんだな？」

「まあ、送つてくれるつてんならありがたいけど」

「おっしゃー！」

そうコマチは嬉しそうに言つて、死神の鎌を振り上げ、遙か遠くを見つめた。

「澪、これがあたしの…… 力だ！」

ヒュカ、と地面に鎌が突き立つた。が、特に変化は見られない。

「さ、一步踏み出しな。そうすれば、あたしの力の凄さがわかるよ。じゃあね、澪、アリス」

そこについて、これからもかなり歩かなければならぬのに、コマチはまるで田の前に目的地があるかのような口ぶりだった。

「ありがとう。じゃあね」

アリスは一步踏み出した。すると、消えた。

「……アリスお姉ちゃん？」

「ほら、あんたもついて行くんだよ！ 死神妙技、名付けて縮地！ とくと味わいな！」

「それは仙人の……」

言葉を言い切る前に、私はコマチに押され、一步進んだ。すると、景色は一変していた。花の咲き誇る美しい道から、莊厳な裁判所の入り口まで、一瞬で移動していた。後ろに下がつても、また景色が一変する、ということはなかつた。

裁判所の前で待つっていたアリスの前まで駆け足で行く。

「すごいでしょ、小町の能力」

私は頷いた。本人は縮地と言つてはいたが、それとはまた違うような気がした。

「さ、三時間ほど短縮できたわね。運がよかつたわ。さ、映姫に会いにいくわよ」

そう言つとアリスは裁判所の扉を開けた。

「……え」

その向ひには、驚くべき光景が広がつていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1256y/>

---

東方幻想入り

2011年11月18日03時19分発行